

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN



門几 3
號卷 3496
3

東海道名所圖會卷之三

目錄



足立

文庫

早稻田 大學 圖書館
印記 35.1.28 藏入 書

古渡 一多居
土用殿 春霞垣
日破神社 井頭
記佐支神社 旗井
青糸神社 蒲冠者
天岩戸事相 姉子祠
外々神祠 今吉
天岩戸事相 乙子祠
一席萬祠 姉子祠
井舟祠 土神祠
白糸祠 今吉
松風里 松姑祠
鉢形前社 水上
八劍神社 水向
氷上神社 素盞烏
孫乃神社 金神祠
高藏神社 二名新宮
大福田神社 素盞烏
寶田神社 金神祠
末社 右八百多神祠
味瀬演 素盞烏
塾田年中祭事
毫加瀬 夜寒里

藤原師長公配所

櫻田

笠寺

星寄

鳴海寺

音聞山

社

○鳴海

芭蕉翁千鳥家

鳴海上聖

衣丸浦

星寄

鳴海神社

名產有松綾

今川義元塚

鳴海尾三國塚

鳴海寺

音聞山

社

知立神社

除蝮蛇神社

鳴海蛇神社

鳴海蛇神社

鳴海寺

音聞山

社

沈裡附馬市

御油

鳴海御油

鳴海御油

鳴海寺

音聞山

社

狹投神社

矢橋

鳴海矢橋

鳴海矢橋

鳴海寺

音聞山

社

小豆坂

豐川

鳴海豊川

鳴海豊川

鳴海寺

音聞山

社

山中里

岡寄

鳴海岡寄

鳴海岡寄

鳴海寺

音聞山

社

免足神社

牛頭天王

鳴海牛頭天王

鳴海牛頭天王

鳴海寺

音聞山

社

石卷神社

山本勘助故居

鳴海山本勘助故居

鳴海山本勘助故居

鳴海寺

音聞山

社

猿馬場

白須賀

鳴海白須賀

鳴海白須賀

鳴海寺

音聞山

社

櫻川

二川

鳴海二川

鳴海二川

鳴海寺

音聞山

社

沙見坂

白井

鳴海白井

鳴海白井

鳴海寺

音聞山

社

安谷

高師山

鳴海高師山

鳴海高師山

鳴海寺

音聞山

社

濱名川

窟觀音

鳴海窟觀音

鳴海窟觀音

鳴海寺

音聞山

社

引佐細江

荒井

鳴海荒井

鳴海荒井

鳴海寺

音聞山

社

犀ヶ崖

舞阪

鳴海舞阪

鳴海舞阪

鳴海寺

音聞山

社

引馬野

富士見松

鳴海富士見松

鳴海富士見松

鳴海寺

音聞山

社

大安寺

角避彥神社

鳴海角避彥神社

鳴海角避彥神社

鳴海寺

音聞山

社

龍禪寺

五社明神

鳴海五社明神

鳴海五社明神

鳴海寺

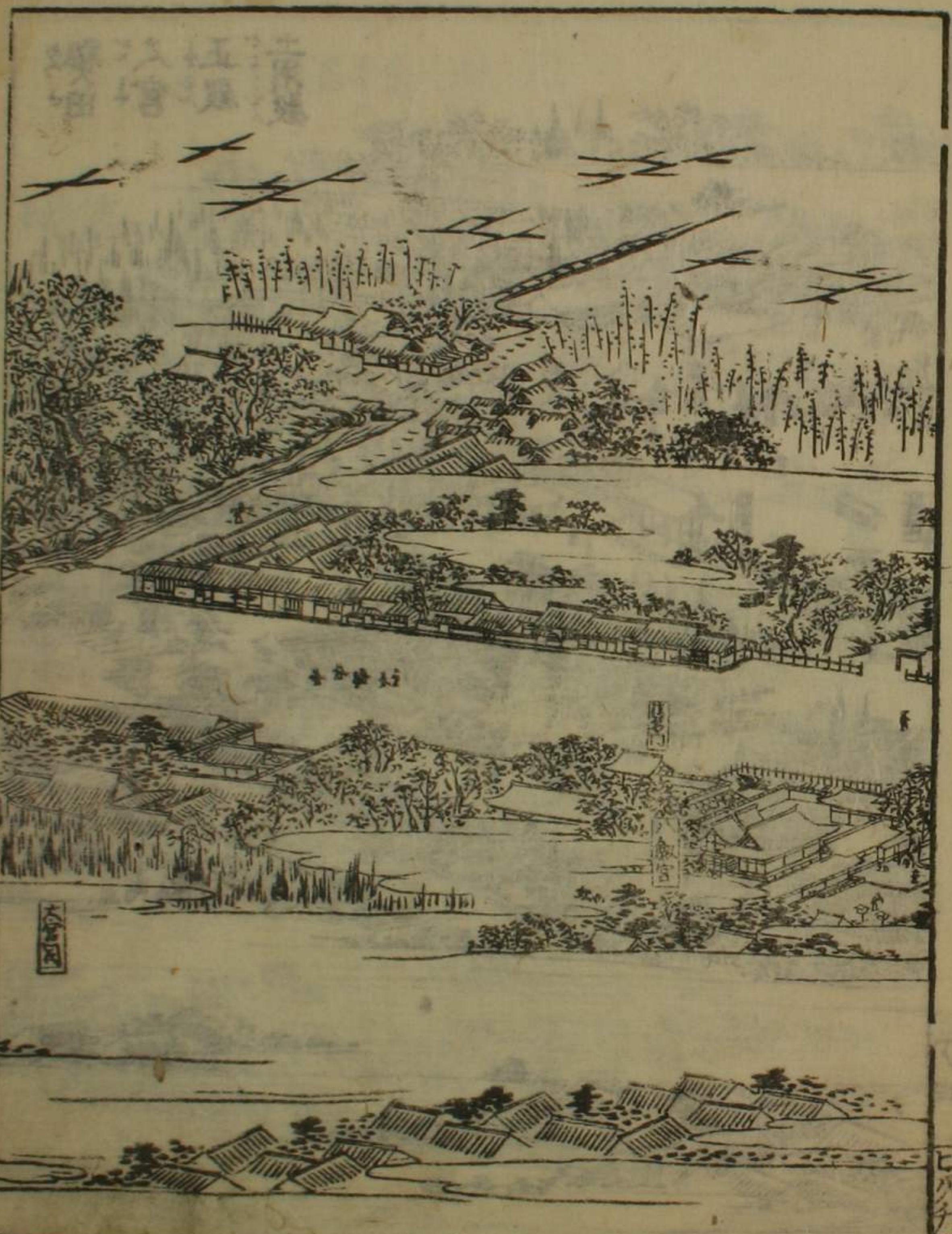
音聞山

社



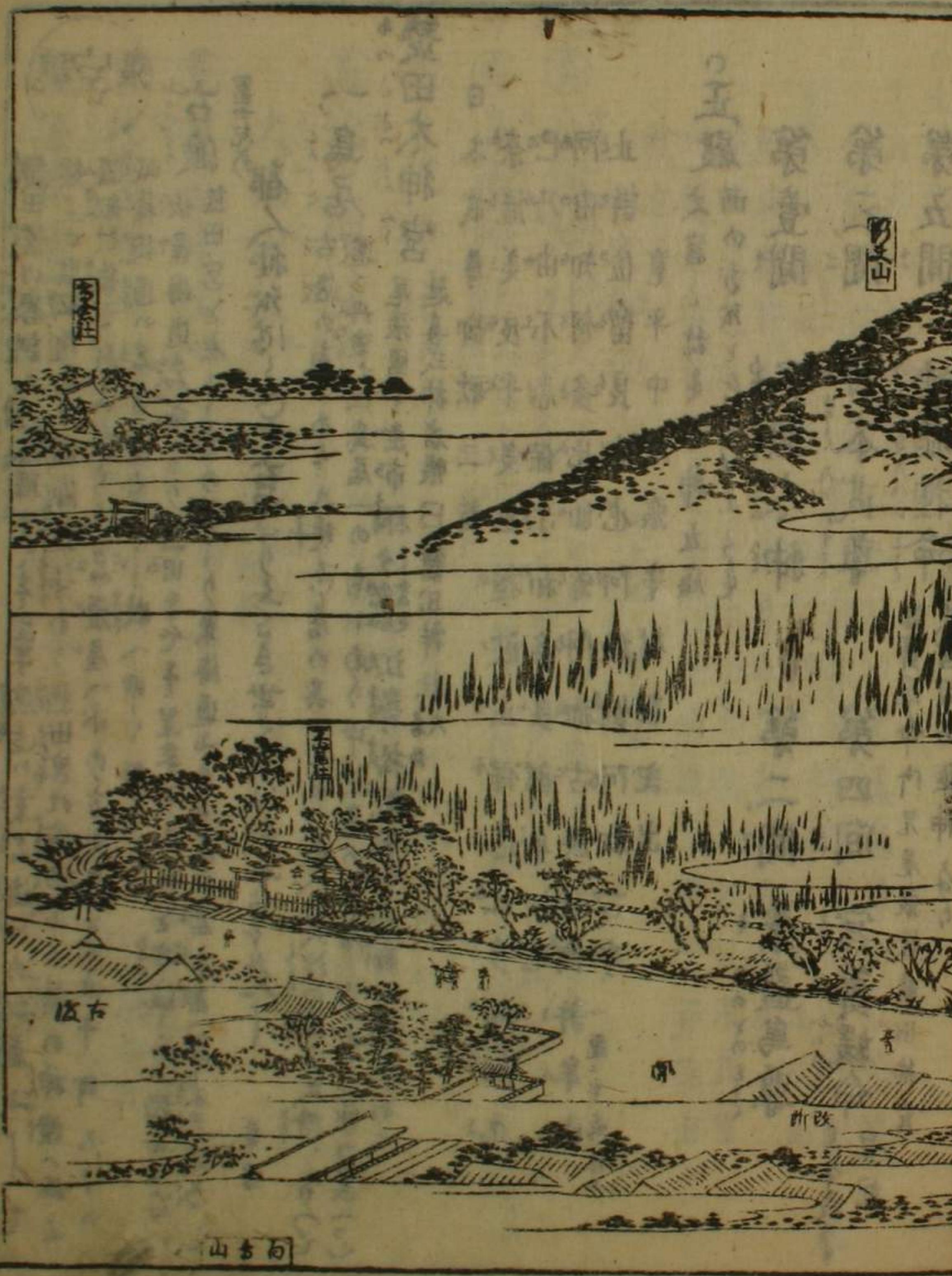
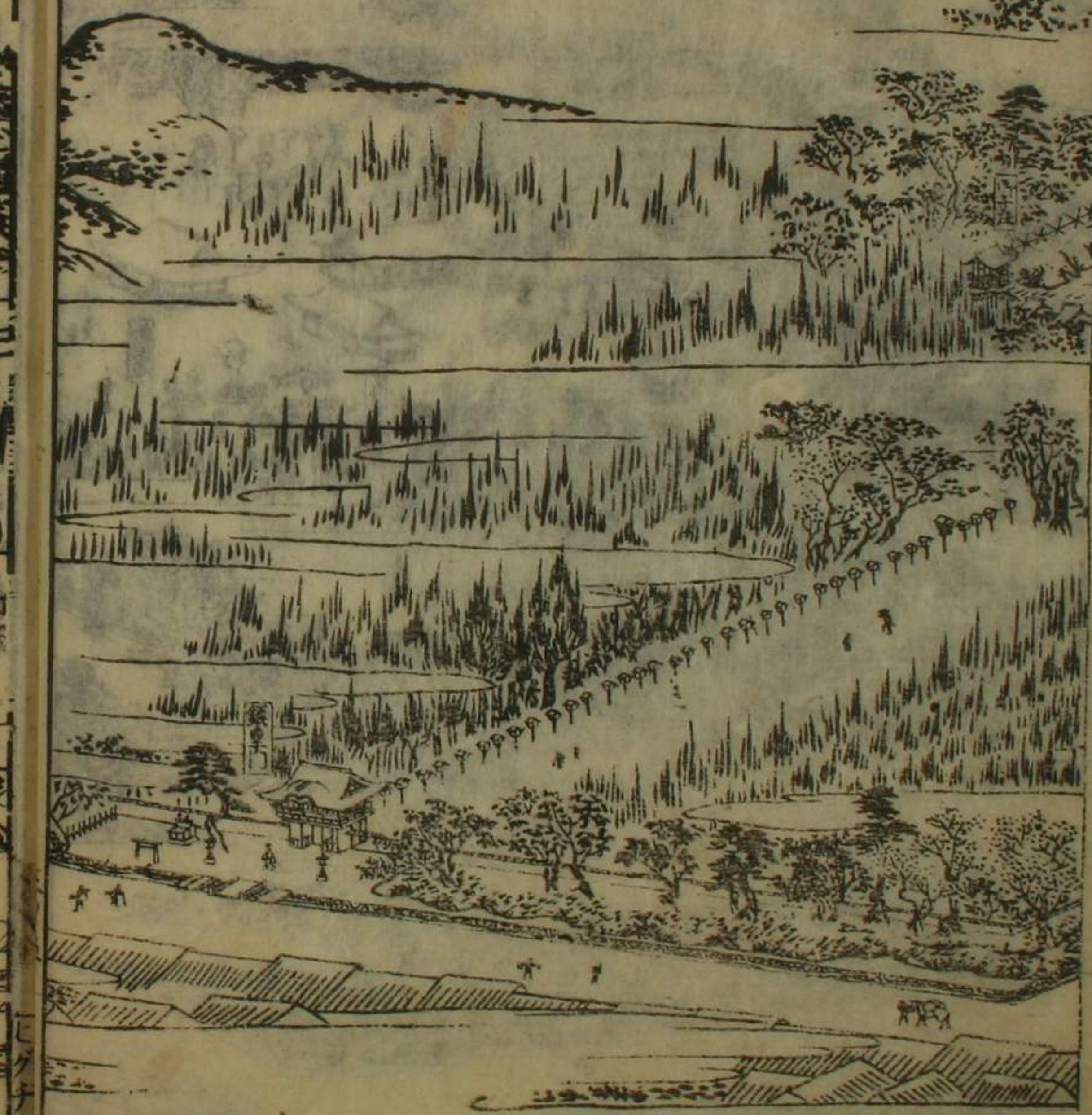
東海道名所圖會卷之二目錄終

頭陀寺
 京江戸行宿同里
 植松原
 天竜川
 中泉
 腹川
 青川
 今之浦
 熊野祠
 見附
 ○袋井
 志呂波橋
 八幡宮
 蒲神明
 沈田者
 三香登舊
 妙星寺
 桜池
 熊野古蹟
 金札鷲
 名産花蓮





古之高波浪倉人神社



宮尾

張

鰐田宮の畠割に鹽海驛までを里半候立へ東名道に於着ふにて
領主の監船所あり同海莊等あり鰐田宮は候高櫓の神燈へ海上
岐薩街道ハ名古屋くわいド牧へゆくなり
古渡 鳥田宮と度く宮の懸たり東海通小至る左ハ名古屋へ出て本島街路
鰐田太神宮延喜式神名帳曰熱田神社大

富士丸乃

都人

神祇

はくもて古ノアニミカセモ多々新やモ先一

堺寺

日本武尊奈流美良御歌二首

阿耶乃知由不志良多比加爾和禮

村波向多良止

保

志

比

多

加

知

尔

許

年

止

出

正殿

第一間

天照大神

第二間

素盞烏尊

日奉武尊

第五間

建稻種命

第四間

宮簀媛命

日奉武尊

土用殿

日本武尊

第三間

素盞烏尊

日奉武尊

仲躰草薙寶劍

日本紀曰素盞烏尊乃以蛇韓

不尚欽故裂尾而脊

即別有劍

之劍斬頭漸腹

鉗尾之時劍

劍此劍昔在素盞烏尊

許今在尾張國也

同紀曰景行天皇五十一年秋八月日本武尊

高藏神社

日本紀

所佩草薙橫刀

乃是今在尾張國

年魚市郡熟田

八劍神社

日本紀

大宮の方坐

神躰神社

大宮の方坐

祭神仲哀天皇

水上神社

日本紀

大宮の方坐

神躰神社

大宮の方坐

祭神仲哀天皇

大福田社

日本紀

大宮の方坐

神躰神社

大宮の方坐

祭神仲哀天皇

源を支神社

日本紀

大宮の方坐

神躰神社

大宮の方坐

祭神仲哀天皇

孫若神社

日本紀

大宮の方坐

神躰神社

大宮の方坐

祭神仲哀天皇

祭神正哉吾勝尊

日本紀

大宮の方坐

神躰神社

大宮の方坐

祭神正哉吾勝尊

祭神正哉吾勝尊

日本紀

大宮の方坐

神躰神社

大宮の方坐

祭神正哉吾勝尊

○寶田神社 同所より神名帳云御田神社

祭神保食今稚產靈今

○南新宮

大福田社のゆえあり祭神天照大神 素盞烏尊

○青食神社

側小飯盛弥立布祠あり

○青食神社

南面石鳥居北東より神名帳云青食神社

○鈴御前社

傳馬町ふあり 祭神天細女命

○末社

右八百萬神祠。編菴祠。王若祠。赫祠。漆間祠。菊浦前祠。

○大宮の東の方より
一之井水洞。土神祠。山神祠。自神祠。金神祠。龍神祠。

○左八百萬神祠。二名新宮。賀茂祠。龍田祠。内天神祠。己上ハ

○姉子祠。今彦祠。水向祠。素盞烏祠。日長祠。己上ハ海藏門

○外天神祠。山王祠。姉子祠。今彦祠。水向祠。素盞烏祠。日長祠。己上ハ

○海藏門の外東例より
○外天神祠。山王祠。白食祠。新波上祠。天岩戸事相ハ

○其外末社所くふ多々一略之

○駒込老々寺みくら早祇日あ川され社の下法

奉誠雅經

十六庚日記

○大日庵強國

もとくもとむやどりよれぬるればあ川され

○宝田庵強國

もとくもとむやどりよれぬるればあ川され

○行持寺よ成をうとひ海をひそかく塙も作の海にく

万佛

○尾張の國樊田のまふひうぬ神祠

はわくちくまつて拜

○本立寺一ぬり寺を歎森の本立寺より名ひまく

まくして

○風ふれれるるくらやふられく神さへるきうとあくとまくと

むれ

○教もくじほ本立寺を歎森のはどもるすふくらくまく

まくして

○書ひまくにあくまくく夢も空すく空の或人の云はば高志素盞烏

は

○尊みく初て生雲の國ふ宮假り有り入雲た門くらむと和言裏と

と

○是よりそほすまれる其後景行天皇代よりのみまくふあくとばれ

ゆくとくとく又云い宮れ幸神ハ茅をとやまう神劍天景行の侍子

日本武

○夷とたのりけく序りゆの附樊田小さきり猪くと美

一條院代侍時大江正平とく侍士ありくと長保のまくと當國はる

ひりたりくるふ大般若とすく此寫ぞ供養とさげてアノ

アノ

願文に吾願もてふみちぬ任限又うちたり古へ序らんとするか
ひまごくもくもくと書つてあるをあむれよあく海ほくすれ

おきしむとあくと金の法がのこみと事むけとまきは

古語拾遺云草薙神劍者尤是天璽自日本武尊
出體旋之年留在尾張國熱田社外賊偷逃不能
致敬而久代閼驗以如此可觀然則奉幣可同
元元集云草薙劍是即斐田稅部所掌之神是也
今愛知郡是即斐田稅部所掌之神是也
東鑑日蓮久元年十月右武衛門朝上洛之時
元祖七日御禦齊令奉幣熱田社當社依爲外戚
神神殊被致中心之崇敬云云

日本武尊も信濃もり尾張小出のアリ國小宮貴後と云女至尾張の
種の宿称れ殊と女とられて淹留となり爰八十晉の
荒神わまと安(半多)は劍とは宮貴媛乃衣小笠を徒よりそ
まも山神化して小蛇をうて神道小横たれり尊又あてひのい
山神毒氣と吐る小御劍をされたりを至り伊勢トウツノノ御廢

野と云ふて脚病ありて取よりて取よりて武彦命とて天皇下
來れよと奏して詔下されひぬ序年三十り天皇至まつて
照一と車の限す群々百寮も見て伊勢國徳慶豈小なむ
まられし小白もときて大倭の國がうて彈琴原小留れり其取
又陵と傳もたられぬ事又恐ぐに肉の古市にさまる其不陵と定め
一とくど又恐く天不登りぬ傳ち云の陵わうりの草薙の劍の官貴
拔あがえり尾張小笠をまく
足利義教公富士見下向の時釋迦寺記
磐田の宮乃神あさまうて御道をばら御行もさくに傳りまむ
伊勢太神宮かて大和姫命に傳うるかひとお令はさづけひ
毛劍えび神殿小止くせきとまくもゆいとゆんこくふを神明
鎮護國家めちうもものりくちくえ侍りく
うふぢれらもあつれえ樟内とゆき族のゆきと 善孝

あつま豈の茶葉公を起し秋の朝やうて未だの毛毛とくを

茎葉の傍と見て

ゑづなら老せぬもり有とひるふや蓬が鳴らぐりせん

四

おれ當社へ人皇十二代の帝景行天皇御時より御鎮座より六厥后

天智天皇の御宇故有く京都遷り十九年が歎て天武天皇朱鳥

元年不再びヒヒ所還座一々其砌へ勅使例祭小立にて官幣奉らせ

自古其餘風今みあり中古奉幣使急りゆき忌部廣嶽されと嘆て古幣拾

遺ふ書こう先社頭の巖さる事ハ八境小朱はち店太宮八劔神社源をま乃

社と初め拝社末社は故く石は高揚下馬のち店南面の門を海藏門といひか

神幸道らの内肉よハ不實梅肉の天神祠あり里表ひの者庵の去宗皇帝四百

餘州を治先に日本が取んと計ゆと當社の拂神ちろしりて仮ふ楊貴妃

と覗れ世と乱一々之を日本とぞる半叶ひば貴妃の馬嶧が原モ高力士

餘州を治先に日本が取んと計ゆと當社の拂神ちろしりて仮ふ楊貴妃

と覗れ世と乱一々之を日本とぞる半叶ひば貴妃の馬嶧が原モ高力士

が爲小室一々之を密別れと云ひ方士楊通幽といふ者ハ四方つる

一ても魂魄と尋られ一一小日本葦葦山がい一かほりと當社小乃あり

一といふ則は内天神と云楊貴妃は靈氣來ることぞ日本古く世人口不膚多

社説少聞え乍り然られと仙傳拾遺と引く曉風集も日本と載る

又東海瓊華集云奈れ徐市始皇の詔を奉て不次日本が求んと日本へ波

熱田神祠あれ葦葦山と記一壹和倭正熱田は巫不縕福と聞て祀を奉て

維摩會の講師と成惟蓮沙門ハ亡母の骨と高野山から來て東國より登り此

地第アテ神勅小從ヒ惟蓮と珍譽一ノ至孝と神明も賞トナリキ

羅國の山門道行ハ草薙は寶劍の靈威と聞て神殿小入續經一百日一禱く

竊小寶劍以盜而僧伽梨を裹ミ携持して筑紫小至り本國小歸の時

忽小海因暴起て濤に漂ひ去る事が幾日俄に黒雲一帯ヒソ劍奪て

元のやく神祠小藏む又治承のひかく政久は義原師長公平相囲れあひて

さまくアリ附當官小傍一琵琶公彈一々ぞ明神感應アリて寶劍

震動アリ一平家物語も載るアラム亞威應驗奉て貞て

やく。兩神殿は木也。渡殿鉤殿祭文殿回廊拜殿勅使殿透壁左右の
樂所。神樂所。神樂舍。神庫。橋部屋社頭小石れ大燈燭あり。銘は曰
斐田太神宮御寶前奉奇進石焼籠寬永七庚午稔正月佐久間大膳
亮平勝之と。篠も其高弟丈餘益の旦五尺許。末師東山南禪寺小同銘の大燒爐よりあれ。一隻の大器也。
西小鎮皇門東小春敵門外の佛殿。又櫻銅の神馬公鑿。神馬の尾陽庚
其外政所御饌殿太菜師堂の當社は神宮寺也。本尊小菜師供が安土に
側小不効堂也。奉地也。又其側小愛染堂あり。太宮の後と云見ゆ。と
いふ間に御井の湯あり。玉井里古迹小玉は井わらそむかくに松岡洞あり
乾の方ふ磐の臺山人断木山是蓋菜山。舊蹟こわ寄山。称山といふ
宗祇の方角松也。立てておあふ圓濟前のすゑ。あう西の方ふ向を山あり
され日本武尊の陵也。菖蒲池は旗綾町ふれ。蒲冠者範頼也。挺れの所也
故ふ蒲れ年あり。頼朝でもあくにて出延。ゆく所母の熟田の大宮司の女と
諸書よつて。御所あ町小中森清名門京清界の趾洞の邊。東門外よえ
櫻花うり。そのれど見ゆね。ハサウエの後とぞ。又御神像小

玉葉

奉松あり。高藏社の側小鉢取水神祠新宮あり。は社頭代石と携く旗
立もる小恙。一曲路。也。信して。五。草用。佐。桙。南。社。と。熟。田。と。跡。も。半
い草薙寶劍と。桑代枝。小。惠。並。立。下。手。後。立。左。手。有。例。の。杉。の。梢。ふ。光。燃。上。す。
其下。社。田。小。燒。倒。れ。田。も。熟。づ。る。れ。ぞ。社。の。名。す。ゆ。と。又。御。神。像。小

あれ。斐田太神。御牌。も。と。も。金。一。か。の。社。は。大。宮。司。尾。張。姓。代。ク。キ。多。也。
今。小。尾。波。貞。職。う。女。の。名。と。松。と。ゆ。く。藤。承。季。兼。小。吉。と。く。り。く
季。範。然。つ。り。く。漫。之。神。か。く。範。宣。セ。シ。勢。ゆ。し。る。か。う。季。範。初。て。大。宮
司。小。城。其。未。今。不。た。え。も。と。も。玉。葉。集。わ。も。と。く。う。れ。ど。む。と。今。も。不。現。利
生。の。垂。迹。か。も。さ。ま。と。一。心。奉。御。也。備。居。ふ。頭。と。傾。く。れ。ど。春。の。花。れ。白。ひ
鮮。る。ご。く。秋。の。月。れ。清。風。小。澄。了。る。院。の。者。神。樂。也。考。人。は。法。晴。を
だ。く。ば。間。断。く。神。焼。の。杜。の。後。小。煙。と。四。時。の。微。禁。忘。ら。ば。是。み。る
平。天。下。也。御。繕。廢。す。て。東。海。を。山。通。道。す。一。の。孟。社。と。ぞ。る。れ。る。

正月十一日
踏歌神事

浪花春泉齋画



舞田宮年中祭事

○正月元旦丑刻 大宮八劍宮 大宮司奉幣

○同日朝 内院供御

八劍宮小祠（二月御幸祭十一月新嘗祭）より大宮より（二月御幸祭十一月新嘗祭）八劍宮供御は毎年春定められ車も右縁で肉外の饌あり社中一統か其仕これハ大宮が限れる也

○同日未刻 外院供御

八劍宮（八劍宮主は木主を大木へ至り候る）より大木へ至り候る也同日神幸改寅の上干龜神社（機式多々一畠之）小祠あり二日晚

○同日晚 上干龜神社（三日未刻）小祠あり四日晚

日割宮の行ひ（五日晚）南新宮の行ひ（五日晚）松坂宮の行ひ（三日未刻）内院共（三日未刻）の如く

○二日朝 外院供御

七種（支度の御酒）持（一冬酒飯と傳へ御福あり）

○五日朝 上干龜神の宮作を放て初市の遺風あり寅の林（大宮）から社中とての事

（御福通とづく群參主祝の種々の事と慶賀も當年也）

○同日晚 大福田宮へ陪從十人並て十一日踏歌の調あり十日まで毎夕也

○七日朝 八劍宮の行ひ（三日未刻）松坂宮の行ひ（三日未刻）内院共（三日未刻）の如く

○同日晚 大福田宮の持殿（小祠）合水の様あり正月十二日寒（小少）と

入て堅く封（ト）大宮正殿の下小埋（ミカマ）と今此應（アヒ）持奉り承本が

あて水の添（タメ）がすよより今年の豊凶（ヨウヨウ）計り立ちより

○十四日 卒射（十六日）戒（十六日）

六人の射手角的放射（シムサム）は三十六年也

○十五日 午刻（十六日未刻）外院依附

兩宮（兩宮例の如く）射（十六日未刻）的（十六日未刻）六人の射手丸の大的と射（大宮司役師三老等出仕）又

神幸（舞田舞）十二人高巾子（高巾子）を（高巾子）竹川（竹川）殿流（殿流）みどり小芻（小芻）御子（御子）合（合）舞人（舞人）舞枝（舞枝）と

持（持）つ次（次）翁（翁）を史官（史官）祐（祐）されと禁（禁）む八劍宮修（八劍宮修）れハ大福田宮

至（至）大宮司出仕音樂（音樂）あり

○十二日 廉屋（廉屋）小おゆて蓬幕（蓬幕）筋（筋）合水と塵（塵）小入封（封）也

○同日夜酉刻 其外諸社依附

高藏宮（高藏宮）日割宮（日割宮）大福田宮（大福田宮）水上宮（水上宮）源吉主神（源吉主神）

○同夜酉刻 八劍宮大供御

翌日撤（撤）之

○二月初未日午刻
柳田御神社鳥哈神事



○二月初未日午刻

柳田神社供御 鳥哈

是日從產長外人平解とて鳥と少しが鑑於鷦鷯の
神事と詔られ小よりして七日己ありて御饌所
鉢銅一傍らに次よ東西六社令て十二社の奉祭と
年次起居時に順度をりくわんあら神祭もいふ
國幣公奉られ一鉢風小して己の夜け佐御たり未の日津田のをす
至るまで故実多一ロ傳

○三月一日朝

八劔宮肉院供御

草餅 桃花神酒

○同三日朝

大宮肉院供御

草餅 桃花神酒

○四月八日

神事 部代頭人補代頭人

八劔宮肉院供御 異日御饌使役人

○五月朔日朝

外院供御

兩宮例のや

○同四日未卦

八劔宮肉院供御

翌日撒之

此日午未 部代頭人補代頭人七社小奉幣あり

七社より 所謂 大宮

八劔宮 高藏宮 日割宮

源左支神 氷上宮 大福田宮

○同日夜

政所 大宮八劔宮

信玄門小かみて會影堂とす事あり

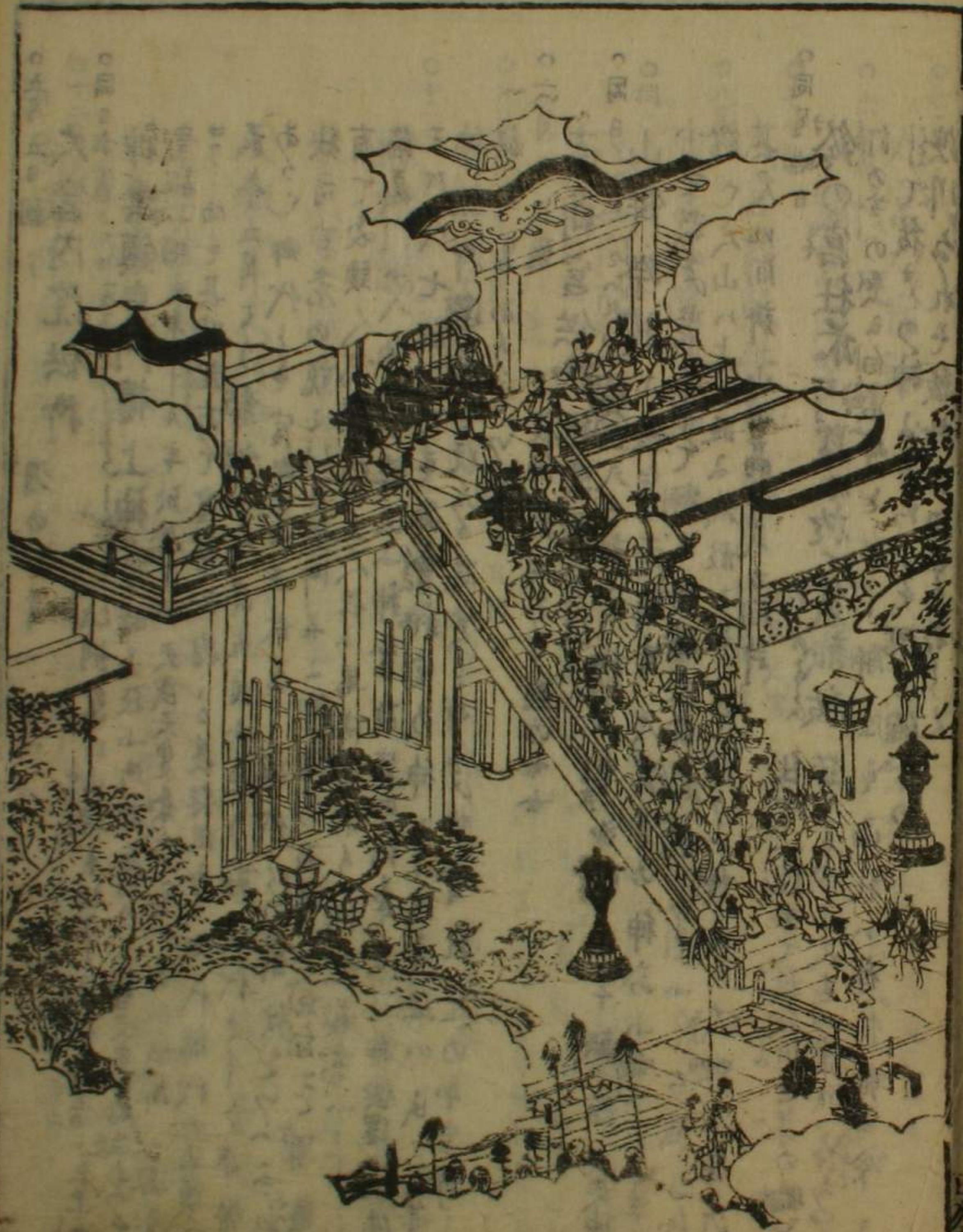
衆人皆くられとはとも故実ありことを

八月八日

熱田鎮皇門

樓上神幸之

祭式



○五月五日朝

大宮内院供御 例の如一

○同日未時 神樂鎮白玉門樓上御幸 時高社小所鎮座り 天智天皇の時政のつて
皇都小至も未計十九年公儀りし天武天皇承るえ年未ひ所より選座
す。此を其時詔有て官幣設格より其餘風土卿代補代の頭人
承年五月より鑿拂して高五月下至り勅使代より奉幣
あらじ卿代も官幣の正使あり捕代より副使と云ふ
社司古老の裁之け自伝所等より御補の頭人宣旨と願戴
有て頭人馬頭人の二人若小馬場をあり行據幕言ふ
海藏門小入神樂へ樓上云神幸故室の折半身一神樂遷御の復
三社人七社行を神會社堂の神幸も尾張の氏人等
神劍所遷座と候。故寔くぞ安西會社堂の平定別
秘文字ありといふ。

○六月五日朝

南新宮供御 伎師從同あり也の事女

○同日未時 山鉾祭禮 舞田八ヶ村より酒へ車並輪山より輪源を文神
小童被多装束して獅子舞鼓太鼓笛鼓等古風おき行持其人四間舞山の高サ八九間許
○同日未時 然の宮社川原小於て夏祭禮 社中一統歩て拔旗燈籠らわ其外諸社共度子出て
行の事の翌日向拝布と付く解除も高社へ神体細妙供奉す
既て後之の神をもとて廟の滿行の儀めいこれそれを後所不用ゆるを

○七月三日

大宮大掃除

○同四日 大宮 八劍宮

○七日朝

八劍宮内院供御

○同四日 大宮 八劍宮

○七日朝

大宮内院供御

○同四日 大宮 八劍宮

○八月朔日

兩宮外院供御

○同八日未時 神辛

○同八日未時 神辛

神辛 村落所大福田宮は作事入ひ、
延喜の勅願よりて神樂祭星奇小刀にて其神威の如きに
一して將門造ふべく大福田の神と村落不とぞ其神極りを

○九月八日未の刻

八劍宮内院供御

○同九日未時 神辛

神辛 村落所大福田宮は作事入ひ、
延喜の勅願よりて神樂祭星奇小刀にて其神威の如きに
一して將門造ふべく大福田の神と村落不とぞ其神極りを

○十一月初酉卯辰日

新嘗祭

○同日未刻 大宮大供御

○同夜酉刻 高藏宮 日破宮

氷上宮 源太支神 大福田宮 其外諸社供御

○同夜酉刻 大宮外院供御又焼拂

大宮外院供御又焼拂 駕食社事次
大房をば神事每暮わく

八劍宮大供御

○同夜酉刻 大宮外院供御又焼拂

大房をば神事每暮わく

十二社祭

○同夜酉刻 大房をば神事每暮わく

二月小仰ひ來りて百穀死よ寒のりく其仰多と佐野

兩宮外院供御又燒拂

○同夜酉刻 每夜龜山裏式あり

其時宮海七浦セイヒヤウシナウを表す。御事、舞州、嚴岐、明神一誠を
奉りて、海上七里以東シナウシナウを巡遊スルヨウ。モアルと傳へるといふ。宮海の
頭カミの白蛇鳥二羽あり。御事、御祭ムツサツと海シマにまつて調進アシテノシマを其時
不染ムツシヤクの御神前ムツシヤクノミコトノマジにて、船ボウと陸シマを渡側スルサイとて、
御酒ムツシヤクと御樂ムツシヤクノタケルを奉りて、御事ムツサツも御祭ムツサツもあれど、ちうとき
御田ムツタツの例ムツタツノリ。正月二月十二月の神半ムツハーフ小賀津村シガツマチ、波ハラの社ハラノミコト。御物ムツモノ
神供ムツクモと云ムツクモ。阿波アハの御社ムツサツの御事ムツサツ。御酒ムツシヤクと御樂ムツシヤクノタケル。
御田ムツタツ七社ムツタツナナジマと云ムツタツナナジマ。大宮ムツシヤク八鏡宮ムツシヤクハクミヤクノミコト。高藏宮ムツシヤクコウザンノミコト。大福田宮ムツシヤクダフタツノミコト。日割宮ムツシヤクヒヅカノミコト。
氷上宮ムツシヤクヒツカノミコト。源ムツシヤクヒツカノミコト。其外舞社ムツサツ。末社ムツサツ一百餘座記す。舞主ムツシヤクシマ。御事ムツサツ。御樂ムツシヤクノタケル。不界次ムツシヤクシマ。

雲見山

雲見山ムツミヤマ。斐ムツ田タツ。大宮ムツシヤクの邊ハタケ。

御事ムツサツひくつムツシヤクヒツカ。御高紀ムツシヤクシマ松杉ムツシヤクシママツシロ。御見ムツミ山ムツヤマ。參ムツシヤク參ムツシヤク山ムツヤマ。

衣寒里

衣寒里ムツシヤクシマ。春敵ムツシヤクシマ門ムツシヤクシマの小北裏ムツシヤクシマ。

三本

備ムツより小門ムツシマ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。

仲實朝臣

頭ムツシマ

同

室ムツシマより小門ムツシマ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。

式真門院

頭ムツシマ

玉井里

玉井里ムツシヤクシマ。本宮ムツシヤクれうとよ。

藻塙

夕立ムツシタツのムツシタツ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。

洞川

洞川ムツシマ。清方門ムツシマのあれ海水ムツシマとづ。

本

備ムツより小門ムツシマ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。

同

室ムツシマより小門ムツシマ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。

中

中ムツシマのムツシマ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。

社

中ムツシマのムツシマ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。

家集

家集ムツシマ。小畠田ムツシマの宮事ムツシマ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。

名寄

名寄ムツシマ。厚見ムツシマ。出又ムツシマ。同名伊勢ムツシマ。御事ムツサツ。

寝覺里

寝覺里ムツシマ。宮驛ムツシマ。御事ムツサツ。御事ムツサツ。

一説

天波國ムツシマ。

修類朝臣

頭ムツシマ

赤染門

頭ムツシマ

風の音ふかや爲うしてワタもみう体きらの里ふ夜うと
暮ハ休スあつまゆの林葉の里初秋の音を知りぬる事あるも

躬恒

海くれく勝の聲月のふ白一

松風里終官のあらわし

名跡大名書

定家

ね風の里ふむれぬかぬる處りやをきく四化こそあれ

定家

呼續演裁断櫻とひより又戴譜橋とも書ひ欄干の塔あり天正十八

年六月十二日相州小田原陣中ふ於て塙尾金剛院守一庭極の庵よし

橋を架け慈母哀憐み縊り此二年供養之儀承ハ法名を記せり川と

三連川としゆへや橋孔は巍堂

新拾遺

古松四五本あり土人湯原といひ古御堂つど

萬

わのち深波をひしかゑ浦小湖こく舟を冲ぢるみ

彦九郎

藤原師長公配所渡知郡井戸田村旧蹟也小龜井山龍泉寺といひ禪

平治盛のちよ左達シヤクダ利りけん(治承二年十月十五日大政大臣右京守師長公

流されば國の臣人小胡麻の那司織季ふ作て討せしも平治小治ふるべ

大政大臣師長公配所渡知郡井戸田

縁坐小よろて又牙四人流罷せられひと歸足右大將兼長侍左中將隆長

範長禪師シヤクダ二人を陪宿候シヤクダにて配所に縛タマ不參タマ又ば大臣の土佐畠忠

九還れ春秋と送り延長寛二年八月小召還タマして奉位復タマ一次の年

正一位小一て仁安元年十月から中納言より權大納言シヤクダ小上りゆ折弟大納言

不明なれハ貞の外シヤクダ加られなる大納言シヤクダハ小成シヤクダ半是始シヤクダ文部中納言より權

大納言シヤクダ上り半も後山階大臣朝守公治シヤクダ大納言シヤクダ外シヤクダ初シヤクダ不参タマ初シヤクダ不参タマ

管弦の通シヤクダ西ド才藝シヤクダ勝シヤクダ坐シヤクダ次牙シヤクダ昇進滞シヤクダらば大政大臣まで窮シヤクダニセ

ゆひて又シヤクダする罪の報シヤクダ坐シヤクダて流れゆすん保えの廿日南海赴シヤクダ遷シヤクダ

治承れ今シヤクダ又東閏尾張國シヤクダを奉本郷シヤクダとして配不付月シヤクダを見シヤクダひよ半シヤクダ

かわち際シヤクダの人の獨シヤクダ事シヤクダをシヤクダ公食シヤクダ較シヤクダ半シヤクダ去シヤクダゆき彼唐大シヤクダふは賓客白樂天傳

陽シヤクダ江シヤクダのやうふ俳徊シヤクダ久其シヤクダ一シヤクダそよみシヤクダ海深シヤクダ次路シヤクダもふ遠見シヤクダ一シヤクダて

常シヤクダ朗シヤクダ月シヤクダと金シヤクダ浦シヤクダ凡シヤクダ小傭シヤクダ琵琶シヤクダ彈シヤクダ下シヤクダ和シヤクダ合シヤクダ詠シヤクダじて鳴シヤクダ聞シヤクダ字シヤクダと月日シヤクダと送シヤクダり

或時あ國第三の宮然田明神（ひらたみつじん）が參訪（さんぼう）致て其族神明法樂（ほくらく）爲小琵琶彈（ひやびたん）朗

徹（とおる）一々不甚所本來無智の境（きよ）され情（じょう）なれど者（もの）を邑老村女漁人（いこしりん）聖叟（せいそう）

頭（かしら）が低（ひく）れ耳（みみ）と聳（そそぐ）といふ更（さら）小清濁（きよだつ）と分て呂律（ろりつ）と如卓（ごくわく）。されども胡巴（ごば）

琴公彈（きんこうたん）セ一曲魚鱗躍進虞公歌（うこうか）と發セ一曲梁塵動搖（りょうじんどうよう）くあは妙（めう）と窮（きゆう）

財（ざい）少（すくな）自然小感（じやうじんこかん）と催（さい）モ理（り）されど諸人身（よしん）の毛豎（けだら）く膚座（ふざ）奇（き）異（い）のふひともも

漸深更（せんしんさら）ふ及（およ）んで謫香調（ちくこうちょう）の肉（にく）ふへ花芬馥（はいふつ）の氣含（きがん）て流泉（りゅうせん）は曲（くにく）の間（ま）を

月清明（げつめいきよ）の光公爭（ひかりむな）ハ今生世俗文字の業狂言（ぎょうきょうごん）絃語（げんご）の謬公（ひみこう）りにて

とく開詠（ひらむし）として祕曲（ひきょく）と彈（たん）めひーと神明感應（しんめいかんのう）小堪（こかん）むして寶殿（ぼうでん）奈

震動（しんどう）モ平家（ひらけ）の惡行（あくぎやう）をりせど今山瑞相（さんじゆぞう）とが爭（む）翁（おきな）むつきやさく大臣（ぶじん）

感流（かんりゅう）とぞ流されぬ

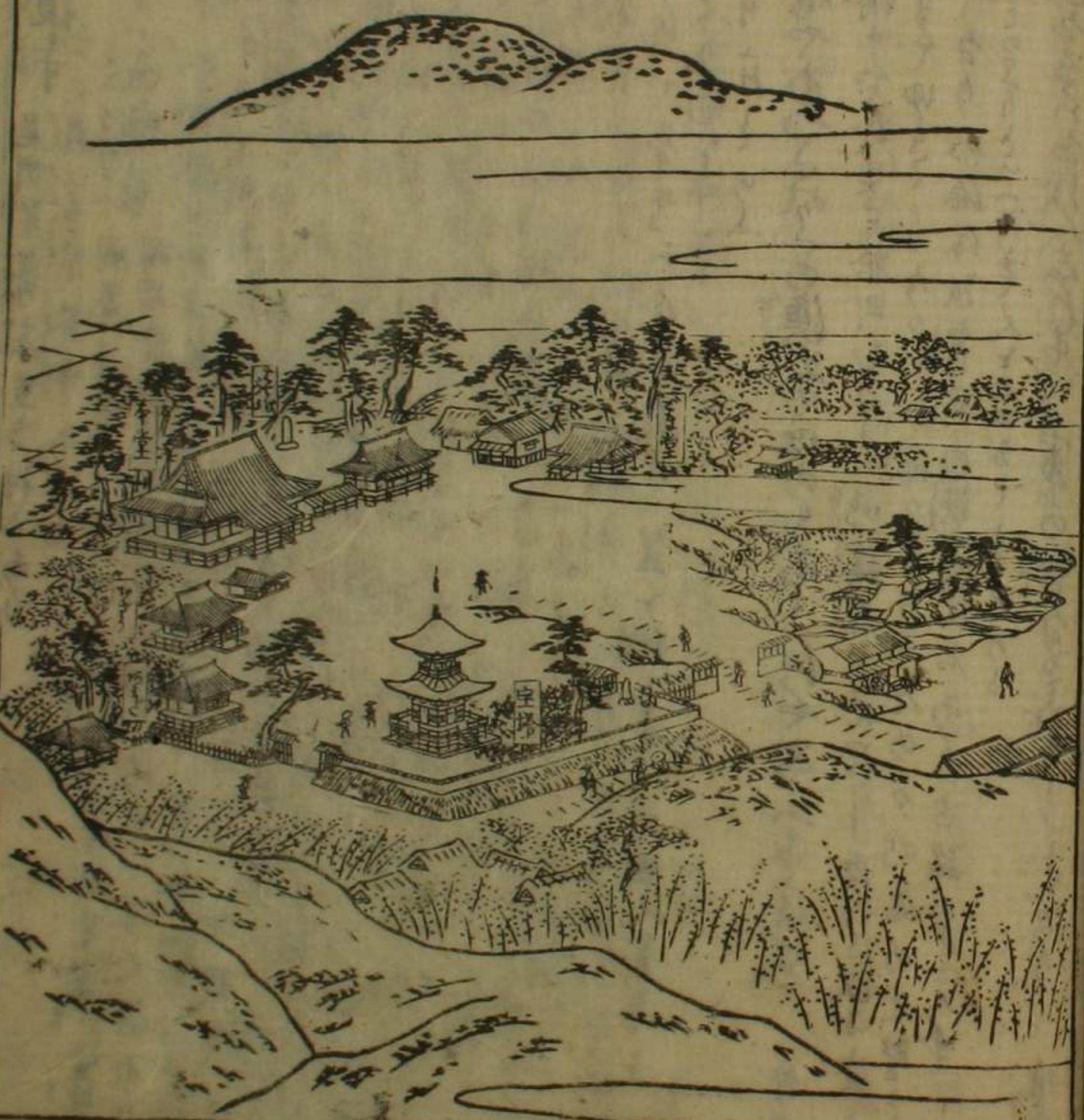
櫻田

東海道宮より以海までのろふ山寄村
戸部村あり其少々ありと揚村（ひづね）

櫻田へ田鶴（たづる）ひづるのちこひづるにひづる

高市連
黒人
光明寺堂子
入道

笠詩



天林山笠覆寺

尾州星寄村に笠覆寺とすあり

真言宗爰寺とす

寺記云 遠山も聖武帝の御宇若光上人靈木が感得し夕明神の神廟

祖師堂多宝塔鎮守白仙祠中大慈天祠あり

護廣堂地藏堂

本尊十一面觀音 唐基若光上人作長六尺七寸肉身師堂
宿霧氣水浸れかの侍女これと被り五口妻の方
向一ゆ時かの妙道のくつゝに達もゆく面相りて被り
初くるとき初ゆし海の長ふ乞之都へ石つれぬりゆく
姓身とあひゆま御簾中と被り其後山地ふづり加藍とゆく
由縁よりにて奉る今小於きと被りゆせん坐ちとし
星寄星寄美ちうりあを部く

青庄とす

新古

鳴海

屋

張

流理跡まで武里ニ名町むり鳴海深と見え一深つてひふ宮立
山ゆくありの海深公育殿の深とす名あり古跡夢々也

波音遺

新古

星寄星寄美ちうりあを部く

正三位秀娘

通光

俊頬

真昭法師

高志成朝居

宗祐法師

寂那法師

藤原光俊

元良法師

大江廣重

筑那廣胤

糸庭

勝海神社

蕉翁

文香家

太田道灌
と著るあら
出陣されふ
和奇の達人
りて豪傑
と著るあら
尾州守海の
破壊されふ
一時廻の備
ゆるは備の備
すさうに軍事
みる脚圍れ
其付と道闘
古きと喧を



海神社 海底無有延喜式内祭神日本武尊今東宮明神と稱す
千名塚 芭蕉翁の句碑て山王山あり南の大津駅より南勢朝鮮

帆京の地へ昇高駅中より代倉氏小鷹翁自画瀬の墨瀬と象藏より甚丈ふえ

你覺の里ね風れ里くいはよを是より是より東

は 一袖波折持リ又蕉翁より傳られ後文庫も家藏と云ひ發句と
石小鷹くおち塚を多く又同句の碑美ち覺ゆもあり是より東

蕉翁のるゝと石小鷹く近所矣くあらま

古跡すもあらざれもとくく奉手筆りべ

衣の浦

古海より辰巳の方

名多 波あらふ衣のくじ此神圓弧みきり風のくみ至れ

西行註解

吉聞山 もうる山形り

祐舉

ま木 吉聞の山ありとやちうのんなりての杜ふあひこゑり
名産有松紋 紋の里薪木より無事あると因源より紅藍の瀬

今川義元塚 有松村と瑞穂今村の路傍のね原より吉聞山ふきいは

祐舉

我死の塚とひ

祐舉

信長記大意 永禄二年五月駿州の太守今川上総源義元が大軍を摧一尾州

祐舉

鶴洲の城主織田信長と攻滅し直上洛あらずに頻小風雲ひ

祐舉

信長が江州の佐々木義秀を三三百騎の援兵を乞て所れ此を軍將

祐舉

ころて今川の上洛を遮る中流乃海は兩城の山只萬石弘家同半内弘高が

祐舉

孟一木を督して今川へ因通して款を乞ひ又笠寺の岩舟今川義季に八千

祐舉

軍を以てあれと拒む早今川の先鋒は遠州井谷の城主井伊信濃を直教直

祐舉

三遠の境ふ至る五月十二日大將義元四万餘騎は軍兵を引率いて駿府を立て

祐舉

は城と持てて其の内松平若西昂正規高力新力高直重寛之藏其外人勢

祐舉

討れたり同十九日を以て丸根城を攻め佐久間清州援兵を遣て清州を

祐舉

呑海の近づ捕獲るを云其所の陣を張り斯く丸根城今川勢を圍め往々

祐舉

まきよ。若きる折第信長の諸士と聚て酒宴にて居し。早くあれと機をもたら矢張ての詮うあんふに馳向く義人と無二の合戦と遂體な軍門よ囁きをきく。十九日午後弗わお立て熱田の方(馬公)北來り熱田の旗を口坐て追付。又信長(熱田明神)彦(武谷肥後)入道をもれぬ根旗あさるが小唯雄ひ答へとあれより尾州は軍勢休む追々夕巷どうア(頼)吉も次第せ神廟にて積上つ其時明神内陣にて物見の音頻々聞かれど信長信作膽ふ銘ド。今日の軍味方の勝利疑ひ。明神の加護ありとて諸軍を下知せられ。故味方の先陣申れ幕次合戰始り。史花とちして攻め。信長先を佑々集へ。松四郎を主射れ。尔西の弾み至て尾州方室長門(左近)率後合ふ。今川の兵八百三十人射らむ。とよ経不善守も射れず。あれよりて傍々を秋岩室三人の首を捕獲。同上。走り義えどもひこ丸根鷲津は城へ攻め。信長の軍將もまじ射され。崩途よりと悦び。桶狭間の少す合戦。小ねれ。惟幕以構て酒宴をせられ。信長は、御室を中納か至り。一城を遂ケル。宣小財木比田携。秀信(櫻林)佑摩(秀忠)毛利新助(秀忠)柴田(信)六勝家(秀忠)申んば。故の之勢。味方小勢をり。御思慮あり。と止々。れも伝多安らば。笠寺は東は閑道が經く。若昭寺の岩乃近き。山谷小到。御封の古塚。馬の唐(佐)給セ。士卒に冒と着を。白布(白)。一様小鉢。奉と行。と向。進と名。と令。とを。とを。とを。とを。とを。とを。とを。とを。とを。夕立。顛ふ。度て。おも。ゆ。さ。り。ゆ。後す。入。と。また。の。本。陣。小。鉢。奉。と。行。と居。う。る。と。御。波。と。川。と。揚。ふ。る。今川。勢。俄。小。周。章。職。所。が。と。や。前。田。太。代。利。勝。木。ト。雅。樂。助。嘉。季。中。川。金。屬。門。秀。胤。毛。利。河。内。セ。秀。頼。同。新。助。秀。忠。佑。久。向。五。扇。波。盛。を。の。と。前。と。う。と。将。佐。大。輔。を。築。田。出。羽。ち。謀。か。山。と。り。う。て。故。陣。の。後。へ。廻。る。泰。ニ。左。唐。門。可。麻。と。馬。旗。う。軍。共。欲。と。う。の。故。陣。か。入。と。幾。横。か。駆。か。し。大。將。と。多く。お。筋。を。筋。き。う。伝。お。う。が。も。計。策。と。巡。に。今。川。勢。が。引。包。う。体。か。て。四。方。の。各。う。勢。と。う。争。う。大。地。一。交。繩。が。

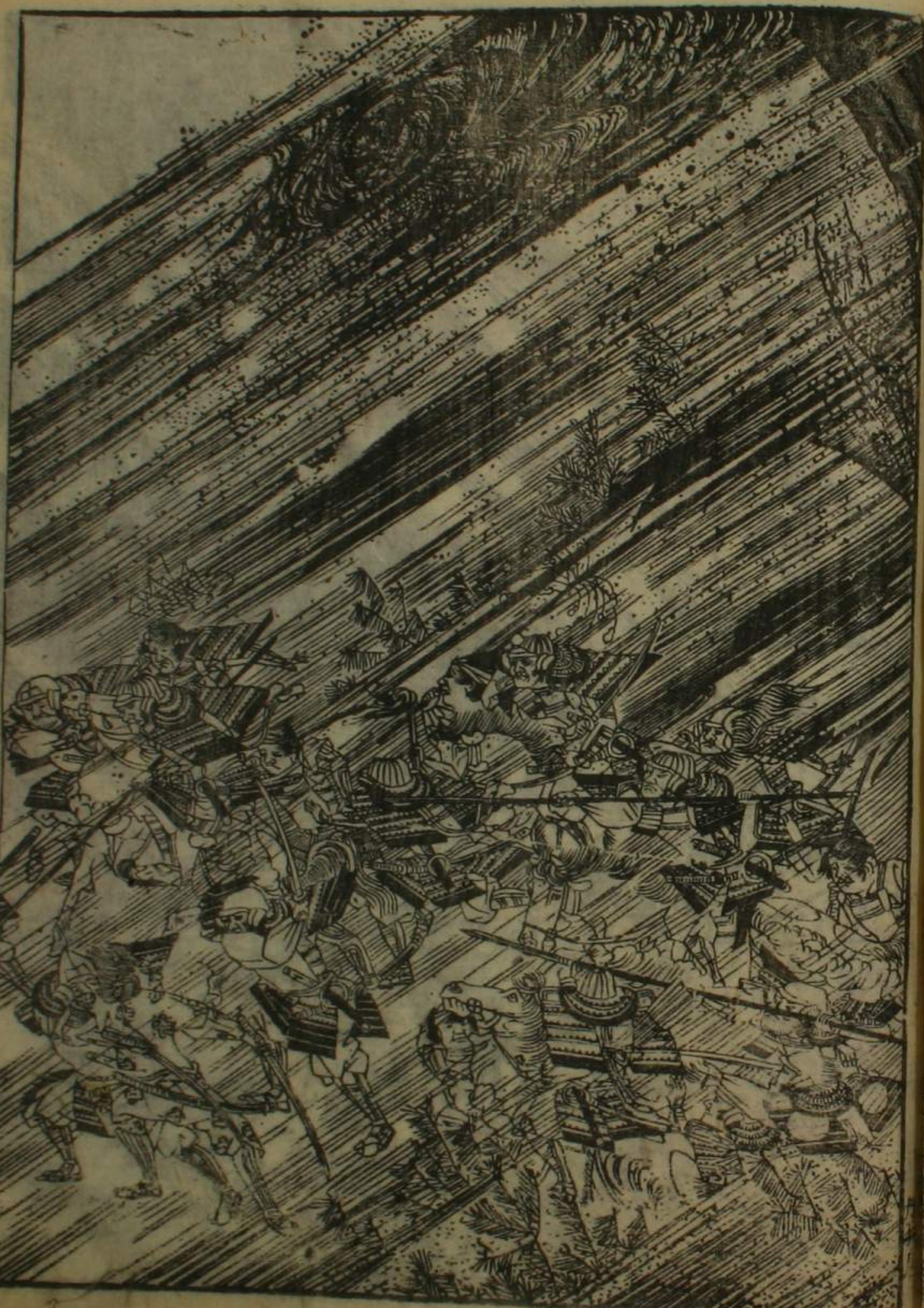
圖二

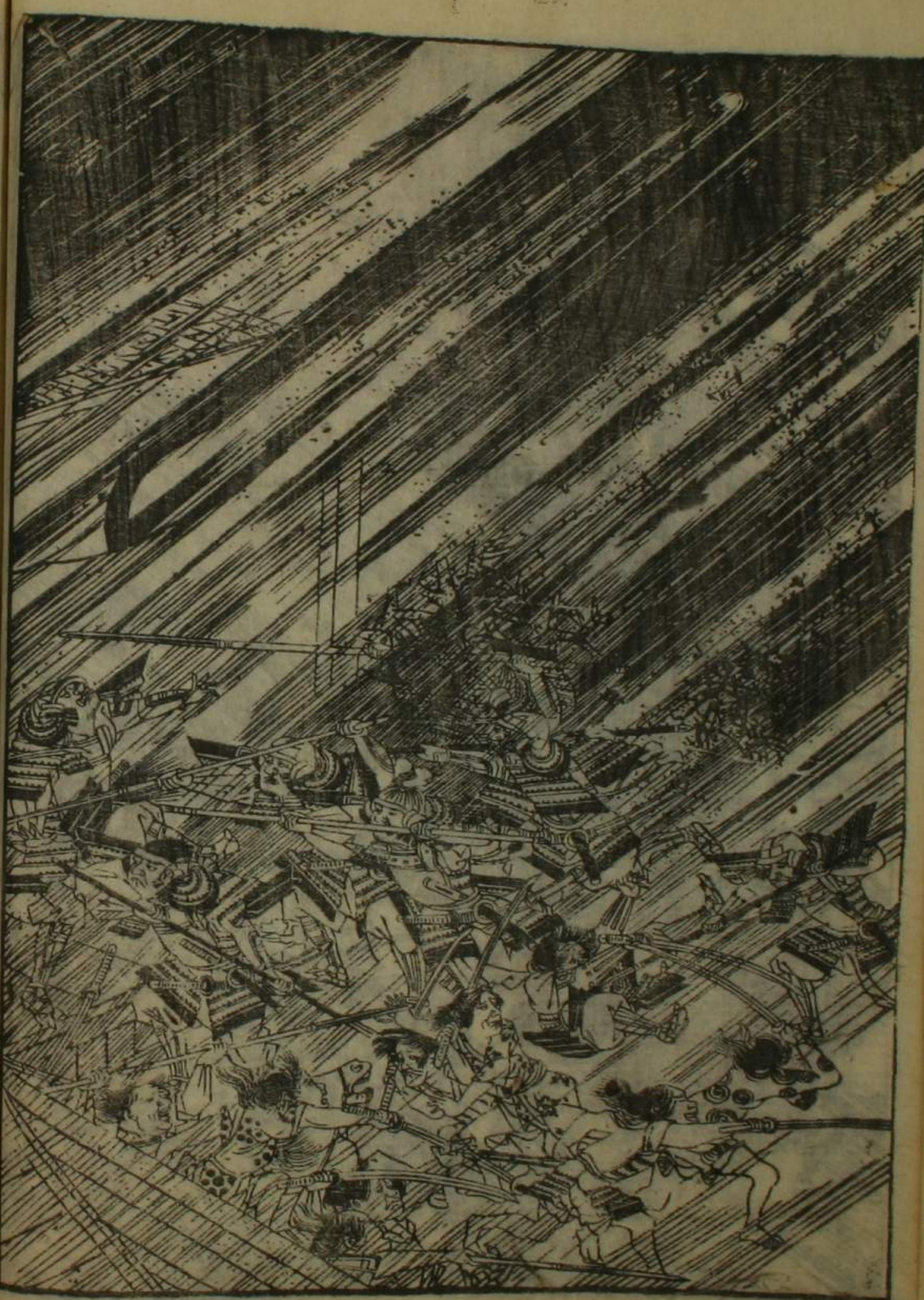


春泉齋

尾州有村の
名も細井宿と
ゆふ。小紋で紅
藍かぶと小源すけ。
諸國よしへ車くるまへされと
わくあちりと
ゆ店てんあふ多く
ゆきくされとみ
費おく人家いえ
前まへくよ







やく兵ふ相言葉ひておもひて攻ふる今川方の勢を計り軍令
札れ、其平一枝やまれいがの駿馬氏者、駿立され閑まへ略一西ハ車船のせ
ゆれを十方と美ノ不織田造酒元林佐治毛利新故志士築田出羽
守中条小市鳥遠山基至郎同河内守一ゆ小年て遣と入。早電のせ
義えい体机小篠とおひけ四方と白眼ト下知一ゆ所(眼)部小平を守沙波
率次督て義え公同邊て鐘とりてはく義えに義双の猛將されば事と
せ小平を主脇の口と割つけキモ利新勝渡(ゆ)大將と主兵ひ長元の連や
至なりと新勝小落合て経小首とぞれふる板義元の首是今川國氏より
代々相傳の山地と名歎と副て實檢小入小年信長入所收び凱歌を揚がる
今川勢ハシヒともうて挑戦不休佑被ちたま上り大國今川反と毛利新故
服部小平を討とうと與れべ今川方あれ必死く力と毫一敗少モ一撃
騎の勢討れし物金一五五百銃尾則方も五百八十人討れ。少死へ
されば今川義元驕遠ニ汗を守殊大英雄武畧行名公深ゆの悔因り只鬼神の

心く憚れ。もえ運限りわり下今へねれわじ名け算の老雲幽谷ふ闇く雲
風も古の邊へと墳塋や落葉よ埋れ成りたる葉いたまほの道の人もむ
きふぞりあると石けやぞりぬ多く枯骸の魑魅ふ托。羊枯が墮源
の碑も暮月累りぬれを苔層巖紙。されども雄名ひえ地ふぐく
文物ハ日星と共よ高。一とんけあくろの事かうべ

櫻

川尾二二州の園。櫻也

光慶

富士紀り

二室ふをえふ代も世のさうひに二の園のつくりをう。竟孝

池鯉鮒

卷

何

岡寄す

暁記云

沈理附かく御肴小裡のそとれとむすも

山里乃名小あひくろとおきうみの料理とある。此の理附

みなくこくめあひけしたまむちうせらねひづく一物を附

知立

神社

駿

三代

實保云

貞觀二年二月授正五位下同。十二年八月授四位上

祭神

菖蒲

不合尊

例祭四月三日吉日仲近隣二十餘村各祭下等の生神

多宝塔

社頭

小あり傳云嘉祥二年建之云九淵の臺

山岡忠左衛門とありあれ取建の御主と

古額

正安年正月印神社法印

古板分明裏文字

末社

神母祠神明荒神

神籬門

石橋

神籬の外あり池と瀧

的場

多宝塔のあるて例年九月五日御引の祭式あり近圓もくらひる處

御

除蝮蛇神札別高松宿院御社よりあれと山に遠近有し信して漫者

除蝮蛇神

札別高松宿院御社よりあれと山に遠近有し信して漫者

御

手洗池駅の東北入口より魚鱗多一殺生を禁じ早懸少へを定め

御手洗池

農民加立社へ雨次第モ社頭より百人以上と喰一式祭モ御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御





八橋古蹟

海裡縣より八町許東の方牛田村の松原より石標あり是より入る
形なり芝生あり是も杜みの山の上に趾といふ方より古來六七株其側に凹あり
流ありよし土橋ありてこれハ八橋と了モ此處より御道より北へ逆
田舎者也八橋燕子の宿也むりあれば宿道あり今令石

又業平の碑銘あり今八橋村立石

古今あつてのこえとて人をもりまうりとてつまくら
三河國八橋を立て所よりあれまきなよめ川のやうふやうよ
いとおりろききりとて本の傍よりゆくせうと
りみそーとてのひらよもく族のむどよめんとくとく
きのこはよめうとてをりとくとく嘆しうそれとくとくあ
ある人のいはくわざくもくとくふみりとてのせとくとく
族のくどくとくじひそれをよりゆく

和哥見石
とくわくわくれをみなく人ツキ鐵のくよもくとくとく
ほくひよく

ま本

根園社百首の附

俊成

駒とておへり八橋のくでよぬくふ柳

西行法師

日

五月雨と余聲の次よかあ事せひくこらのぬ波の八橋

順德院

文治二年百首のうちなり一

日 関係ある都をとて八橋よもぐれ

中勢卿

杜あみはつら辺の旅衣あゆ下りけもたちぢやれぬ

家隆

日 八橋のあくすれ里の秋風よむ波く御やあ筋もく

慈鎮和尚

拾玉 旅人をとてこの八橋れぞとてとよりやくぬま八橋

妙宗

五月雨よむけそのこれかねてとよりやくぬま八橋

中家

新拾玉 蔭衣ともくあらむ八橋れむのわくよ筋とくれづ

十六日記 八橋よそあらんとくとくさに橋もみくに取りぬ

ゆうたのくとてあやうれ八橋よ夕香ひてつまくら

円舟

先行ノ記 沢くして冬の國八橋にてとされば在原乃業平杜あみよす

冬の小見をくきひのうよ源かくとくとくありひあれてもあらず

見れどもかのよとあらじとやへくとくいねのよきをよくとく

花田よちちとくとく形えとて編みれ表をとく

八橋杜若
古蹟

ひき

燕子花
夏
立
風



か月の月橋の
ちゆくの月橋の
とくえりーちゆく
下ふきへねあと

弓
とる
今
そり
そのうそれ
みまの細

新





かくて三の園よりうぬ稚裡糸馬場とて、放里の豊原とて、一の橋、
名はけて八橋といふ。夜も睡う響參い夏は舞一去も水がまく杜のみ
時次遙く開き花へむじれをうへ候ゆん橋もかうト橋されど
姿度はうはほん相如が世族うしやへ肥馬よハ橋もすて小おもへ人へ首
幽子身に捨う窮る小類であ橋と波うハ橋よハ橋もすて小おもへ人へ首
もひこト橋柱よ橋柱よちれも持ゆるむかく持ゆるもの今も又そぐ
佐佐木生くる三ののすゝみはん持きてんせうつゝもや

送子和赴三河
東方千騎下関門澤國江山雨後音物茂卿
社若橋邊春艸色知君駐馬問王孫

三河八橋木
中郎遺跡問荒村落日春陰野水昏
燕也不來花也赤蘿蕪愁絕奈王孫
たり立中將北吉妻下伏小編集原は書々古今観え多
支八橋燕子花の名不ば賞ぞ千年の古今集及び伊勢物語と
此小業平行傳自記とひありひ寛平の官女伊勢守御の傳ハ諸冊に尊の
と号ひ、和泉式アキナキや、齊宮の事と初々書りとひ加筆の直測古事に於て
伊勢の傳也傳といふ。既ニ一役せり業平は自記といふ。既も移りん仁和の仲門荷川
の事と書ひあれ。業平は没後、元裔が在中將の論と著て其人の
風流と行半と一役を書く。又、傳を論じて古事記の傳と書く。又、傳を論じて古事
記の傳と書く。又、傳を論じて古事記の傳と書く。又、傳を論じて古事記の傳と書く。
必しも盡く在氏小出し或云、二家三代集傳授みもすばやく在氏と傳業
むくかう源氏お名の虚と實小書く。又、傳を論じて古事記の傳と書く。又、傳を論じて古事
記の傳と讀口傳へ業平御臣一期の間半と書く。又、それ古事記の傳

書くつづきへ上の句下の句を重ねて書く所を他所のあらひとちづけ
ほほの字にゆく川のことをかへば橋とへつて石をかうてかへ八橋と書くふ
直瀬あせ川と訴トを水と四方は田園の用水として八瀬の小川と號て
あれ小橋と下たりけりよ瀬されぬと書くたる併尼簾倉ての
財や早廢して橋も燕子花もまともに下れ年々に廢蹟をを
げ作勢を居らう坐て杜ゐの幽艶るとありふ一名白若花ともいふ

齊宮花

夏葉のあひ絶中にも翠玉葉折被すもむくまくまく

八橋杜ゐの圖々無く一堂鳳凰手画諸品の詩絵衣服の歎美渠

橋雲廢寺

東行西行の旅客また下馬も今後よ一堂ありあれと下馬根を

無量寺

八橋村より禪宗八橋山と号ひ堂あり業平作一軒薄あり

本尊正觀寺

前より八橋の碑あり下野州奈須黒羽之産由良不造立之云

狹

祭神社

賀長郡猿投村あり

景行紀五十二年猿投山小笠

大

彦

祭神社

高山之例某九月九日高國ゆく是法屋張り敷匠の集と南土賤ハ

祭神社

景行紀五十二年猿投山小笠

大

新宿

新宿

梓弓垂るの里たゞて櫻花のこゑの歌ひて思ふ

高家

翁の矢別ふるゝい筆うかはあまてとんまよ川水

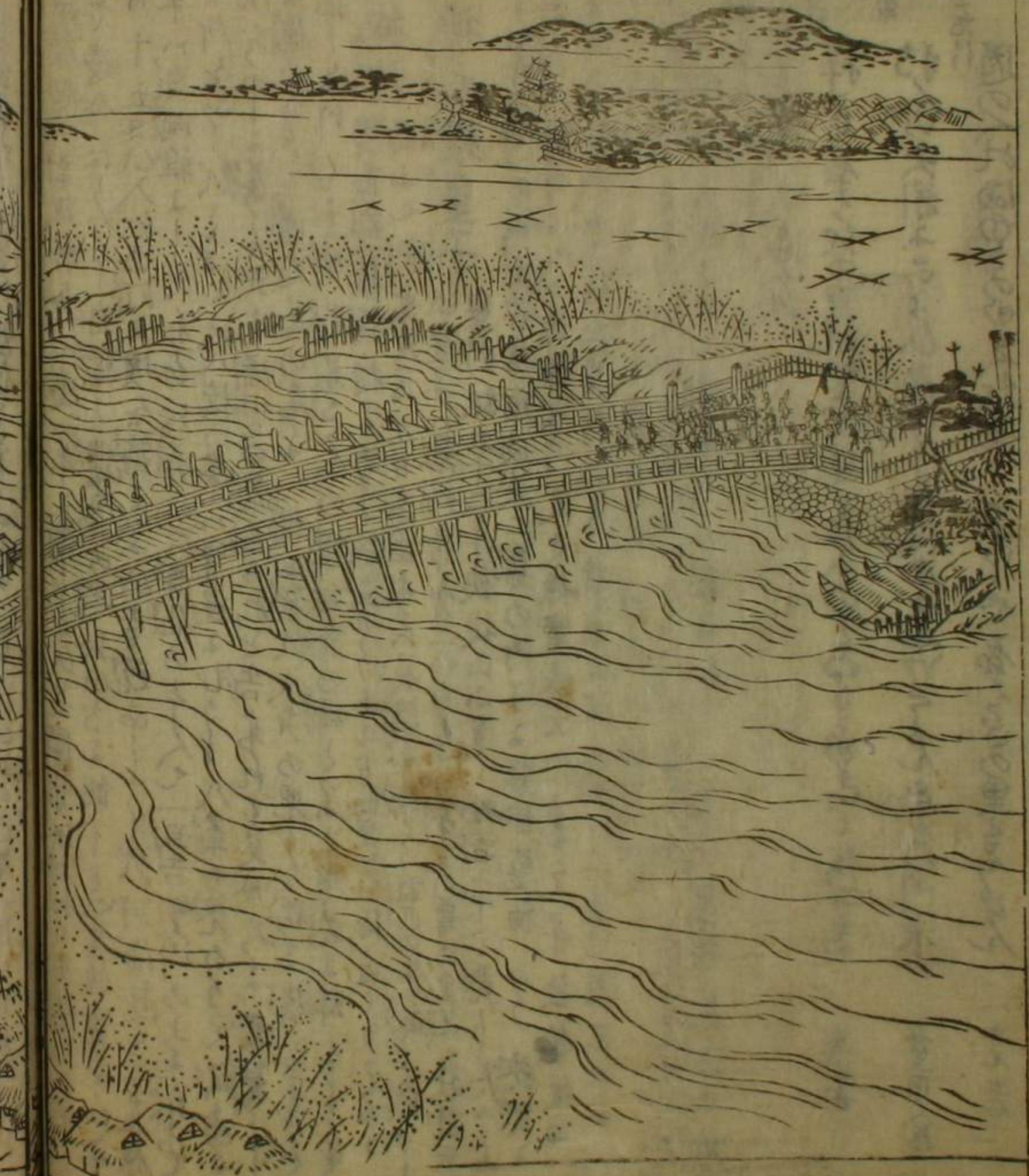
高家

富士

通のれぬのが紅葉てもや風毛の里をさらん

高家

支那舟橋



支那
舟橋
あの中と
渡りたる



津瑠璃姫墳

西矢別たの方園の中下ありしり夫婦の宿れ長が崎美濃の

比もれを瀬波動作本とゆべ今の大瀬波瀬波の北りて又山里小芸子役手

比もれを瀬波土宗の寺ありあく瀬波の像義経の像あり寺謡云九房

判官五合妻トリの所ある御

は娘を愛一ゆへと我

名家思ひよ矢を弓の里けり妻せふもおぬ人ふぞ先そ

と明

矢橋川

矢別里の東ふありお源岐横山落く末ハ勢源川とつ

豊川の二太何

西尾ふ到ニ流と脚海入國源を三河とつ半ハ夫別川男川

万葉

三河之瀬頃物不落た提刺爾衣手湖干兒波無爾

春日

新六帖

名店せそあらてわよあくまうやをと兵川の警乃一も

行家

矢別橋

夫橋川ふ架け長キ武百八間高欄頭巾金物橋杭七十柱

紀行

うたせわいぬとみづれと梓弓屋と紀の橋ふきとをアイン

佐草元政

東紀行

真まくふきとあきへやとひらん夫別川乃橋の板を

光度々

今ハム

建武の足利治部大浦尊氏廉倉か左く天子の令に叛

吉

新田を兵衛督義貞幕度使と蒙

うれりてすりばの西寧小陣を足利直義ハ

威不敵られ狡猿の倅也却く足利戮されぬるを

天子の命に叛

吉

鑑不後醍醐天皇公家

一統の御代帰又大塔宮公足利直義に乞けむを

吉

直義姫嫁邪知

者されば嫌念せ密小廻モ天皇は御恨ありて足利公歟す

吉

勅ぞありと尊氏新田

攻られて敗ゆ一嫌念せ建長寺にノ別巖御衣の壁

吉

廢帝余生

と云れを欲諸軍に練られ又旗上一丈ハ八十万騎の軍勢と

吉

勝利が得ゆ

と云れを求記ふ又ノ星霜累て川の水ハ古今に亘りて

吉

凛々と流と西海は源風穂

穂や一泰勒の諸侯ハ弓と僕すて威風高上す

吉

只五枚の虹

と弓架セ一長橋とくほ所の事カド

吉

丙辰紀行

森森白双是昆吾波激河邊千万夫

吉

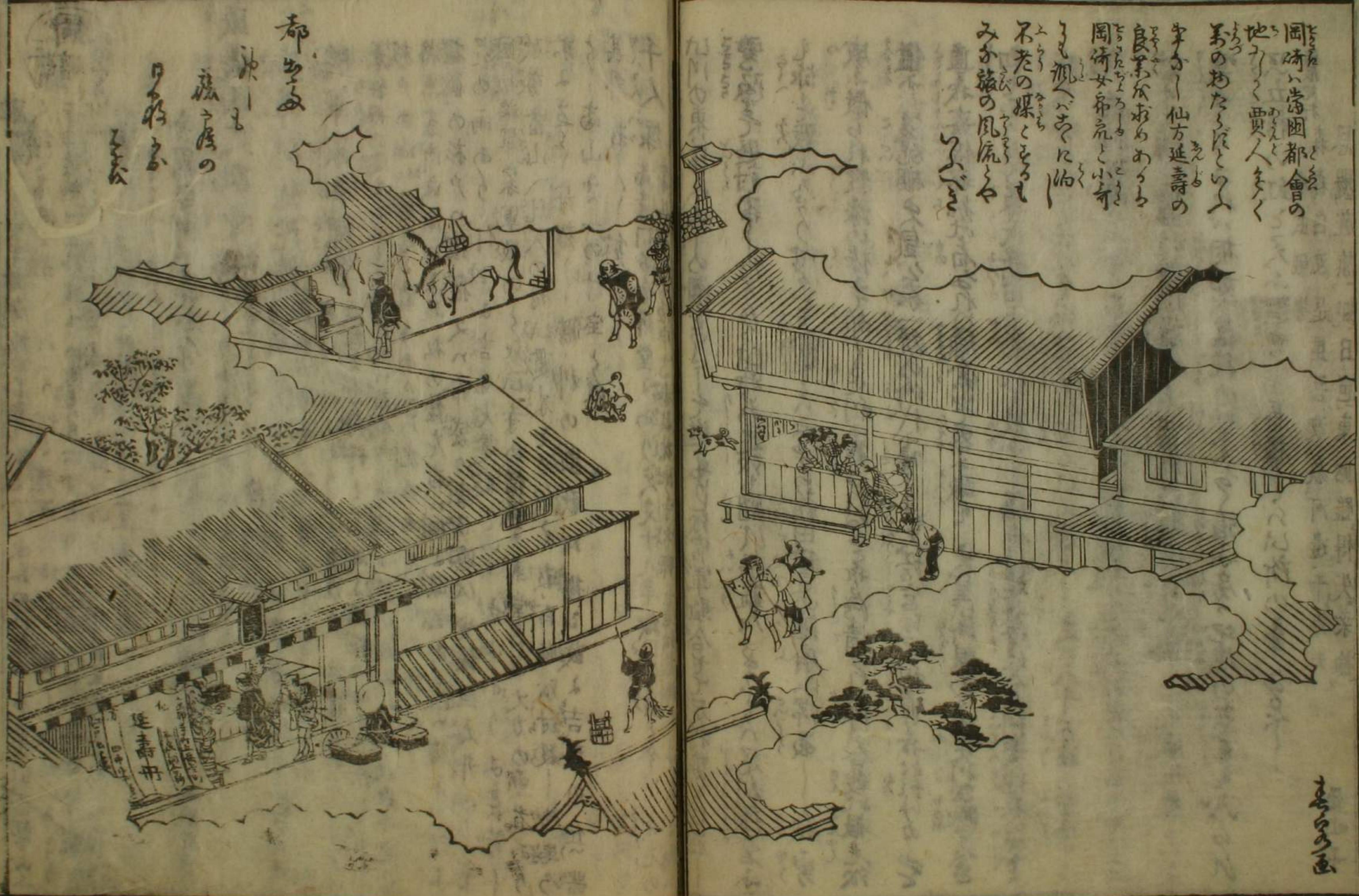
恩賜旌旗

日色東隅難得失宋榆

吉

羅山子

岡崎の當國都會の
地にて賈人多く
馬のわらじどり
半分一仙方延壽の
良家がおらめくも
岡崎女郎元と小奇
も観へやに泊
不老の媒とぞも
みか族の風流も



岡崎

志摩まで里半臘寄城旧名龍城と云ふ永和の役に平左衛門守を御主
人初て高藏と號くそれより代々諸侯より守護し慶長二年より
本田彦義せしむれ城下の町貢九六十鈴町丸七曲といふ為國都會の
壯麗にして故生治石高橋あり生土神と云ふ

故まろとねむああふ笑えなれど春の風すよ

今朝空川にて舟をり名松つれあさむよ人の待ゆ

小堀道則

旅道山大樹寺

岡寄もり小を里軒鷹田村ふゆ

將軍家御魂舍

本堂の側に在り又大書院子へ神像右の方に御花供
源頼光金持件といふ襖小鏡の画あり御聖水徳の
牡丹の間も同様に鶴の間へ趣金として作ふ鶴の画あれも永徳の画也

松戸の画あり十室より吉瑞大貴財と云ふ
將軍家御魂舍の上庭松の陰た右の相は鳳凰あり海千石雄子
櫛の杉戸の猿猴又ハ布袋の唐子遊び金縁組天井中には茶
花の画あり十室より吉瑞大貴財と云ふ
國初將軍家軍戦のくじ山寺の僧侶より堂と云大力の勇者あり
故當山へ乱入の時費本とゆく
木よちく宗蘆利の凱歌に揚る故より吉瑞の無器

其外教く多

千人塚

滿寺門房念佛堂より設立十八年鐵田信廣と今川義元の
家臣比奈傳中は泰林院寺御齋長老公前持とてあるよ

大屋川

其一つに夏の江へ小船多く石と船きて頗るかななりの舟を運う

木本

船と水を流る水の大屋川のうに橋をつくるのち人

馬頭

小豆坂

上條今小豆坂古良端を里半もあり天文十一年八月十日今川

信廣同小豆坂泰秀と鐵田信廣は信秀の古戰場也今川の先鋒も鐵田

一村山

柳谷鉢小尾張國山郡内村と云莫干吐懷編と名録よりこれに二の

とて祠書ふ武昌國よりよりちかく本三河とあり塔もくづきあへ橋、放え
とあり、一説に猿投山とも云ふ。舉母里の東北よりいどろん今三河をくわくわ

祠書ふ武昌國よりよりちかく本三河とあり塔もくづきあへ橋、放え
とあり、一説に猿投山とも云ふ。舉母里の東北よりいどろん今三河をくわくわ

祠書ふ武昌國よりよりちかく本三河とあり塔もくづきあへ橋、放え
とあり、一説に猿投山とも云ふ。舉母里の東北よりいどろん今三河をくわくわ

祠書ふ武昌國よりよりちかく本三河とあり塔もくづきあへ橋、放え
とあり、一説に猿投山とも云ふ。舉母里の東北よりいどろん今三河をくわくわ

祠書ふ武昌國よりよりちかく本三河とあり塔もくづきあへ橋、放え
とあり、一説に猿投山とも云ふ。舉母里の東北よりいどろん今三河をくわくわ

木本

三河を二村山がつきてはけせもとれもととぞあり

山峯

おわらをふるゝ月の秋のうすす月のまことれ

西行法師

まふ

俊忠

あら川二むる山の岩はト稚わせ先へつみたと
を委ふて、まもがうのちく爲ふ半のとくニむるのふ

至精頼

ちくは豈がれきとらあくれもまこま來ゆむ二村のふ

平義朝

千葉

さ月盆み婦たじくめのやくまく等小はくまを寄るみ

權中納言集

農の里

岡寄のふはあり舉母も書に今旗下とるく内藤侯領せらかたの
千葉
手載集経類のかへ東海よりむりの時とあれしよらじ

隆頼

往ちくあるもの里ふ處からく一村山とこそぞれをばれど

久武

立塔をみはしてのん様花あらしの里ふ句ふぞり

久武

ま木

向ぬよ候ひとまれる却の是や衣の里けは備ふぞりる

俊忠

赤坂まで武里丸町むづへは藤川が宇治川

河
推うをもみぐまのなれどもあへてまや東海のうな川の里

俊忠

方よ

さくもことじゆうじようとまのういはとも

久武

若河のうち深もゑひ纏うすく夜の袖ぬじばる

好忠

航行

まかれもむづく宿のゆうぞとむづき匂ひ花の若川

岸友

山中里

まくのうのまく川むづく山中耕東の農家よ白草

雅世

宮路山

見原五古齋路記云官路山と今い只山中とのつむ

持統天皇の幸

花園

わくもくらむ君のあくろを井ふくとく官路山と越へてあらうが花の原されへ裏井と

妙法

大都

くり迎へ山を高くじびとく盛衰記小平宗盛

天皇

吉野

宿ともおほき宮北山と越はくと書き同記云ゆう院院大政大臣御公

尾張

ふくもくへんせう配所のはれくふ官路山よつけ入本の紅葉

妙法

琵琶

ひくふ谷の流き昔の岩よぬどひ麗の尾の上よすく虎の皮のあらのよみて

天皇

君の

あくべくいりき題のあらきとゆく昌哥セーグ我ハ神アモ

天皇

家集

まくのうの馬の部ひりやくみくまとおまきとおまき

対恒

十六

秋日

天皇

け山までひむきへとあくたまうよよめめりのと

ほうちタクムヒーもまえしみ地ふ事へまわのあくあよを 阿併尼

山の裾登小井のある所より登のつるあらひにてその段ふがてまもんをまき

ゆだれのそ越登が高きをてかくすと井の一むじ 東籠

日興院と洛之時 建久元年十月十九日巳亥入夜令宿

二村山法藏寺

本尊と正觀と平安堂

出生寺としよ

たゞ頼光の公滅よんか首の手ふ此く生くちとく我まけ

赤坂

記行

招福の事

宗尊親王

本尊阿弥陀佛

奈良院所宇至德二年京師赤福寺教翁丈人あり

其燈塔は擇迦院の二尊やわん焼肉親王堂山初の本尊公移し

持藏鎮守あり上層の塔は將軍家御宮下層の塔は名泉あり寶勝水と

御油付十六町右の方より外院の古城あり又紫雲閣

御油付十六町右の方より外院の古城あり又紫雲閣

招福の事

一安達ふゆきのくのくばれ妻女とびとむちにり招福

平齊時

阿

記行

招福の事

爲相

本坂と安達の里へとまよて夕日ひゆく名をありとん

御

赤坂と安達の里へとまよて夕日ひゆく名をありとん

近津圓白

本坂と安達の里へとまよて夕日ひゆく名をありとん

近津圓白

久野原富士

久の山の雪の下
年を度て春の時
かくはるかに春の時
うるはるかに春の時
耳も地をもれと賛へ
と賛へと賛へと賛へ
と賛へと賛へと賛へ



茶請春晓賀

ま柳や
あし君の
艸づみ

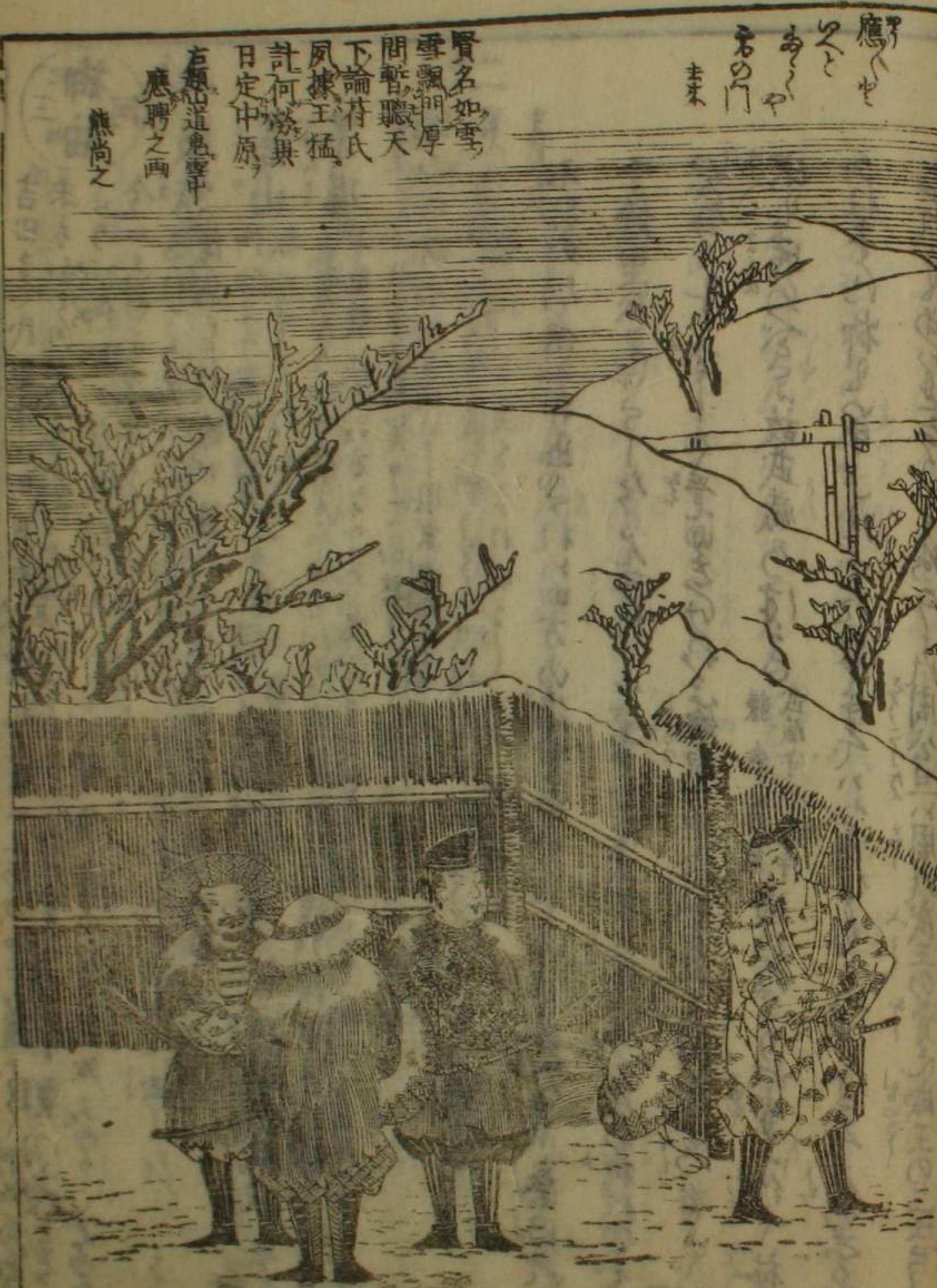
葉村

洛東大雅堂
餘夙夜

二之牛
州久保
山本勘助
故居

洋精作

甲子
晴信
流金
青蘆
不休
之本
病也



御油

河

吉田まで武里半四町貝原告婦祖云古ハニシのをくみ通と
未ちかく行おもとからおはいはあらわくわん望みゆきと豊門を改と見
より少子佛へつこうはよのり志賀須音のつうりはあらく見る
今ハあらよづりく吉田へゆく。志賀須音のつうりはあらく見る

本坂然はれとうたの方別街道あり荒井今切の海上波波く見
本坂然はれとうたの方別街道あり荒井今切の海上波波く見
陰波をり遠州浜ねの東へゆく。本坂然はれとうたの方別街道あり

嵩山

船アリ嵩山(里)二ヶ日嵩山(里)二里半

氣賀三日氣賀三日氣賀三日氣賀三日氣賀三日氣賀三日

茅場

裏賀うちうさんをキテ四里山所本海通して遠州浜ねうひやうをま

茅場

キ里許江戸の方うり天龍川まで三里船アリ舟とくさ内まく十三

里半

二ヶ日とく氣賀キテ山路エテ迷ム

二ヶ日

名の湖水公見アリ風景真妙の勝地也

二ヶ日

見道豊川アリ至るこれり。一への街道也

石むの川原ふす出され四方の海をもふして山々置ク秦田也

千餘里

公見アリ。一の山々して草木ともふ蒼茫う月の夜けのぞ

いふの如ト本

學のちけり。蘇原の中に教をもつて有く教

まも達メ

故武藏乃はる(鎌倉執權)道のたより。紫ふじく松を

くれまほ柳しゆう法とたのまをハカヌレモうくまうのまを

かれもあらとさうもあらう。周公旦ハ周ハ成王の子也成王の三王也

燕

ソふ國ははくもうきをす。一の方とおら一時かどりの甘棠

のひととあらて政を行ふ。財はもく金うめく然くは民ふ至るまで其本を

うかげきえ人の慈父アリ。まこと羅とをめあう。國の民あらうて

其德政とぞのぶゆく。周公去アリ。跡をもの本と教してあくべて

うく教かん。慨り久里後二稟。皇東宮坐ちやく。ふ學士實(政任)國不却

り。御製たまへ勢たうらもしくあうんいそぐ。ホーリ本の司も

召公のあとに退く。人をもみあと多す。あまくねれの性遷のままでもあらう

て松かうれる。柳をも是をうん案。是は周公と要がん。國の民の如くにあら

うて。行まけ。松がま。奉其孝意。定くたがり。とくをもれ

載まく。一の金の柳。りく。松をも。とく。

よがとく。松をも。とく。松をも。とく。

のあく。一の松。かちまく。はく。松をも。とく。の今。通と。よ方。お旅。人。金く。シ。ふ。あ。と

今其宿人の家居をかかふのうる事などあるまことに於てあら
いきはくやひささがる事云々からゆゑてと骨本年
首もよみつたる里人今ゆくわづれんを以て休見のゆくら
ねどもあまくちを覺ゆき

あらりぬよし川乃くもせのうる人志アシカニ

光行

東鑑云嘉禎四年十月廿日辛酉風雨辰冠出御
於野原甚雨暴風然而御輿前後人入者不及擁笠皆以熱鼻午刻以後屬晴酉冠橋一本御宿云云
三州吉田驛植田氏考云本豐原ハ郡本野ヶ原也東濫よとの原と訓
点セ一との無何訓か草書音古ムニモビ今ハ名鉢也豊川とも之へテ
東鑑云嘉禎四年二月八日賴徳將軍豊川の宿ふ駕御ある同十月十九日
豊川の驛小石井の下あり又曰駕御の今道と云ふ
三河國駕御郡度津あれと鄙言ふ了ら河と呼びと名度津も寶
能都ニ志賀頌香の渡ありては了ラ陽ふありト名と呼へ
度津豊川の度津庄と書一もありもク次の波ハ其名高タキヒと俊く
洛々度津庄と書一もありもク次の波ハ其名高タキヒと俊く
久々と半くありりと云
ス本邦ウハ無ハあれと云う次ツのアラヒ跡もくと云
ス本邦ウハ無ハあれと云う次ツのアラヒ跡もくと云

名所二百五十四

家隆

御

御津神社御津御神今般洲明神と称す

神詠

奈神下照比咩命

月始奉圭田加神禮

十月三河國御津神社

土記云御津神社圭田五十六東

大明神

所祭下照比咩命也天武天皇四年二

十二月一日加神禮文德實錄曰仁壽元年冬

大明神

洪鐘一口、脱体圓成、河津龍宮也

大明神

洪鐘也

大明神

洪鐘也

免足神社

又鷄口の銘小万治三庚子曆三月十五日懇良子寄進の旨地に鑑を

例案四月十一日故花炮と多く揚

當庄

刺史細川兵部少輔源朝臣

主藤原政家

大願

大願

大願

大願

大願

大願

大願

大願

大願

祭神菟上王

古事記云開化天皇條下大股王之菟上王者比賣危君之祖

上王

白足

尊年中依神告併祀八幡宮祭式射取雀十二羽爲祭牲

三代實錄云貞觀六年二月授參河國正六位上鬼足

鐘銘云參河國寶飯郡渡津鄉兔足大明神

洪鐘

右爲志者天長地久仰願圓滿國上安穩諸人快樂所

神從五位下

鐘銘云參河國寶飯郡渡津鄉兔足大明神

藤原助久

大工阿弥陀佛

助久

奉鑄也

勸進聖見阿彌陀佛

檀那

應安三年庚戌十一月

檀那朝阿彌陀佛

山

山本勘奴故居

宝飲郡小坂井の東牛久保村小字下第跡田園

牛久保の長谷寺小勘奴の守伴摩利支天の小像

公安並に

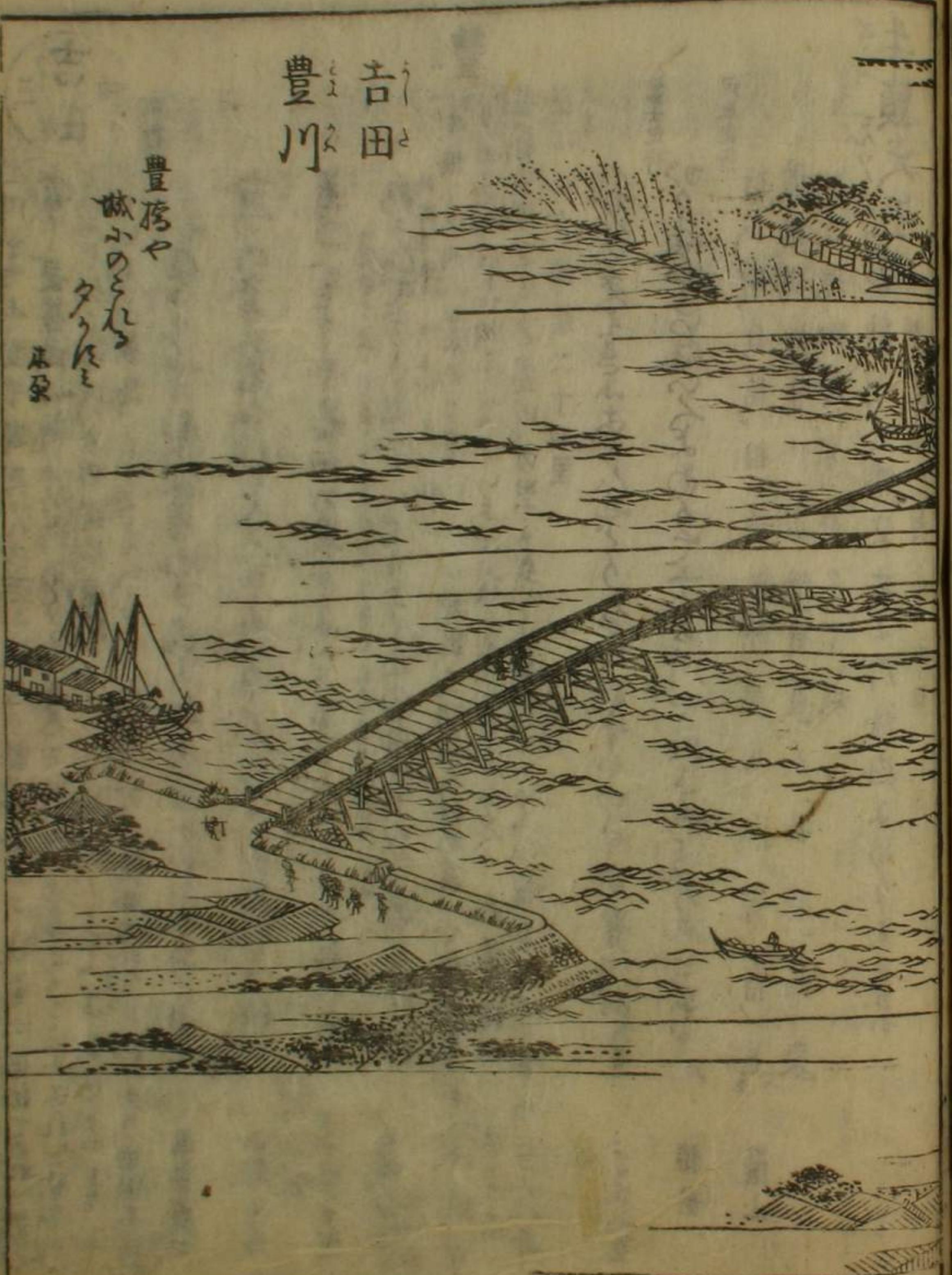
山本勘奴の守伴摩利支天の小像

公安並に

吉田
豊川

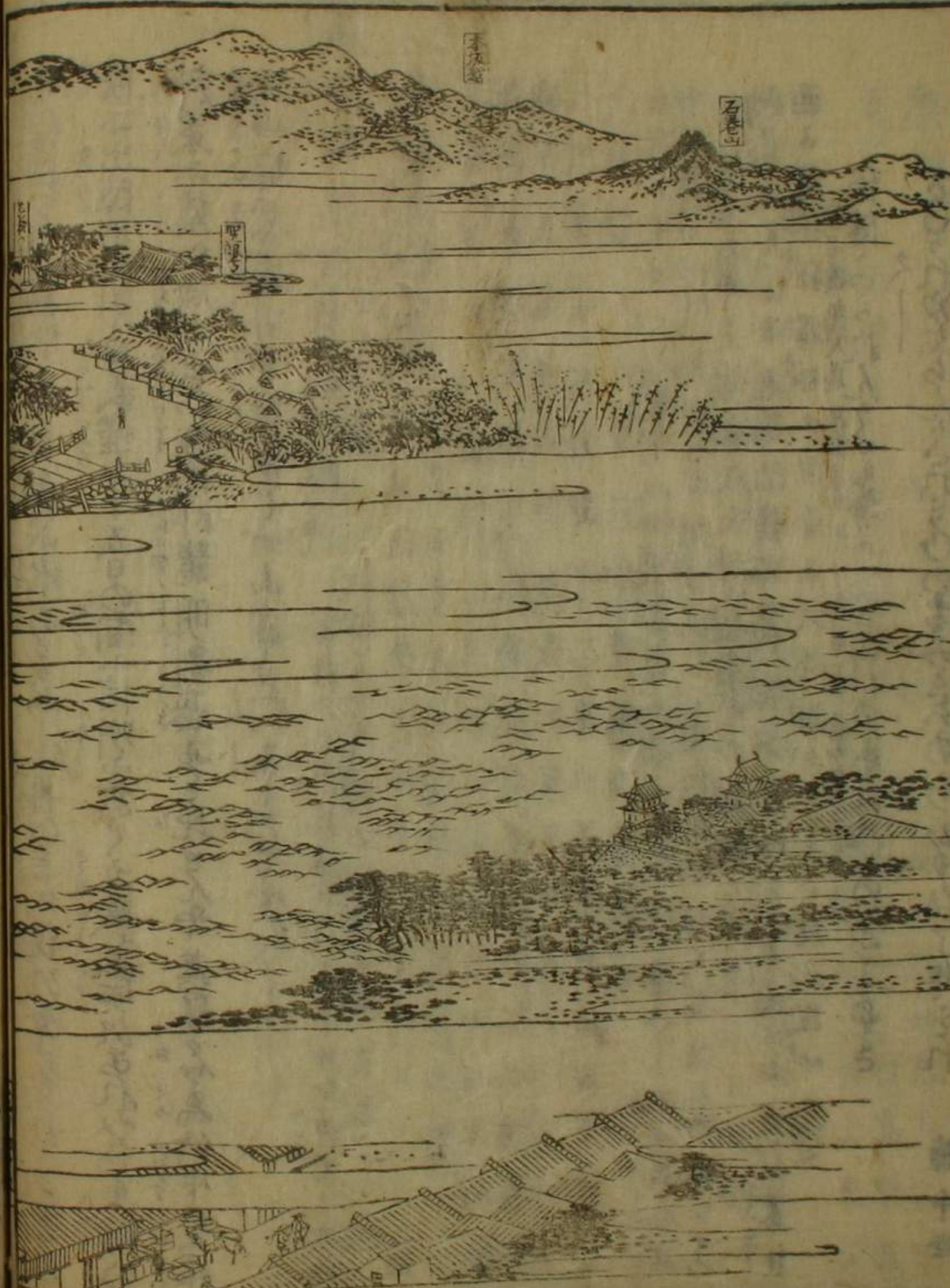
豊橋や
誠ふのくら
タノミ

木葉



東方山

石巻



吉田

河

紀行

古川まで走り半驛肉をの方小城あり驛路鈴小云牧童小白初てこれと葉く
とす長篠城の追ふの事あり矢玉太刀鎧などの痕あくとよあれと登牛
とすよそれ代々の諸侯連綿とす居城の事石主平
火口谷あり家所くよそくより又関小万が墓城下賢養院ふあり由縁不詳
といゆるすちの神すくさむ者古田の里と云く事と 烏丸光廣
古田の名をされをきくとよし都の古田野の福ど 小野於通

日

差してもよしや古田の里とぞもてうもんに旅のを 小塙宗甫

日

おひてまく株うへたりよー田の面からぬぞあつては 近傍三義院
此御深平一軸 三州平坂後外山氏所持 信尹公

豊川よし 古田の旧名今橋といふ橋小なりての名をくわゆる源は信州の山溪より満て
長篠の橋を渡り豊川の里と到る豊川とよばれ橋底より勢州白子川邊えい
渡船あり海傍二十四里 烏丸光廣

日

物人のをとふあよひどうろはあすやうん豊川のを 長笠内大臣

日

かく風くの風くよあくて十よ川や殺くの木とせん 雅世

日

行 何 日 築 相 送 敦 州 風 馬 過 晓 霜 上 龍 橫 道 路 中 川 流 無 畫 夜 人 物 有 西 東 一 枕 還 鄉 夢 家 一 書 久 不 通

羅山

牛頭天王祠 神明八幡宮共ニ供供肉があり天王來 例年六月十五日

日

放花炮はなぱう 立物とよあれとくた花炮あり火の粉らぬゆゑ大金瓜覆ひあす
立物とよあれとくた花炮あり火の粉らぬゆゑ大金瓜覆ひあす

日

三小火瓜うけ立物へ瓜上よ群る見ゆる人く 游 遊 俗被く羊皮

日

其外町々の花炮數百ありく群集夥くわい 一

日

翌十五日祭式はつ 吉田五箇の寺院ちり飾山と歩く至て歸て古雅こひや うけ被

日

直衣太刀羽佩く馬上に頬朝の乳母うぶ とよのあり綿帽子めんぼう ふみけ

日

騎帽きぼう のういどう馬上又十六人の殿との 飾山と歩く至て歸て古雅こひや うけ被

日

鞍くらと冠かんり城肉じゆ と走駆しゆく 中小富山重忠と名ある者のあり

日

馬射ばしゃ 並なが 小錦こにしき の陣羽織はき と着く北月小帶こくげつ を拂ほ そ同どう 大だい 頭かぶ と被は 百人ひゃくじん と被は 古雅こひや の体相たいあい と

日

腰こし と左右さゆ 編ひら 金湯衣きんとうい と着く 金頭きんとう と被は 馬上まじょう と禮れい とく

日

其その 方ほう と被は 金頭きんとう と被は 馬上まじょう と禮れい とく

日

其その 唱歌うた とよく

日

天皇てんのう こしふ人こしふじん や何なに 佛ぶつ やて海かい すく日本にっぽん 一いち の荒神あらみ

日

あくわ 橋はし 本もと 薩さつ 見み 払うつ 名所めいしょ の花はな とよくいふ

日

六月
十五日

安東



三え
吉田
天王
祭

駿府
鬼印



煙巖

山鳳來寺

勝岳院

三州設樂郡門谷村の山興すあり

大名直言の二派又

本尊藥師佛

長をす八寺用基利使仙人一刀三禮の惟日光月光十二神將

大天王と安

御宮殿壯嚴微妙

神祖御宮

諸堂の上方より御宮殿壯嚴微妙

別當職天台宗掌頭

高覺

拾き

おひそかに櫻社ゑれ人の國ふも

今れ心もぞとあり

五感

紀風流

おひそかに櫻社ゑれ人の國ふも

今れ心もぞとあり

五感

拾き

おひそかに櫻社ゑれ人の國ふも

今れ心もぞとあり

五感

憶君奉使向三河

送爽鳩子方之三河

入函關

滄海波

物茂卿

吹笙若水寒芳艸

幾訪鳳來寺

歌芙蓉

峰齊白雲多

物茂卿

聞說登臨名蹟

偏嵩山少室定

如何

物茂卿

鎮守三社權現

中央熊野權現左山王地主權現右白山權現

物茂卿

六所護法神

利修仙人百濟國朝の時六人の護法神

物茂卿

開基利修仙人堂

山堂ハ龍彈の通り造れどり龍彈の通り

物茂卿

常行堂

本堂より孫陀併山堂ハ後を易盛長三行圓七御堂

物茂卿

二層塔

源賴朝々の建立樺原御廟を以て云傳

物茂卿

鐘樓。樓門

諸堂の次第圖画よろづく樓門の額ハ光明皇后の御筆にて

物茂卿

鏡堂

護摩堂の儀ゆあり薬師の東方大圓鏡と曰く諸人の願より

物茂卿

名號題目石

藤原氏建られ弘法大師の授筆と稱し御供せん人等も

物茂卿

八王子祠

薬の門谷町より妙法瀧

物茂卿

奥院

本堂九町許山奥ふあり。六本杉

物茂卿

煙巖山

本堂の西より不動尊が安置。六本杉

物茂卿

勝岳院

不動尊が安置。本堂は乾ふ當る利修仙人あひて住して築きと簷ゆへゆ人蕭樂

物茂卿

瑞瓈山

奥院より乾ふ當る利修仙人の加持水旱天霖雨増減

物茂卿

隱一水

西谷より利修仙人の加持水旱天霖雨増減

物茂卿

○高座石

○巫女石

傳は本堂より乾の方より利修仙人山神の招請巫女天像にて聽聞し仙人説法して法華華嚴の法意と説其時八人の衆向一歡喜せ所と巫女石といふ

○尼行道

仙人より女人汚様の身をばくふわらずとくに尼行道也父ありひつて淨沙尼といふ人利修仙人と名のあく附尼れかく渾渾尼怪しき岩頭よりく一七日遠見されども仙人足へかくされぞ夢りて岩と名す波しうを急碎けて落散すうとみ谷谷底尼谷といひもぐるくる波

○行者歸

當山の峰より林の方大聖へ行道に役行者登山の時岩路峻く登りやまとをば教道より到り利修仙人小遇す故よけ名あり

○猿橋

ある山のあゆあゆむ猿橋渡公宣卿登山の時溪川流水にて猿橋落する忽然とく猿故百歩く丈足と廻合ひ橋とうへ勅使か波セ一ゆけ名あり又今之の舊號本の

○篠谷

南の方小高い山也海濱娘山の本ち善師件と字信一篠谷ふ接く毎年示現公蒙り十二度の海濱娘公信初は

○山伏堂

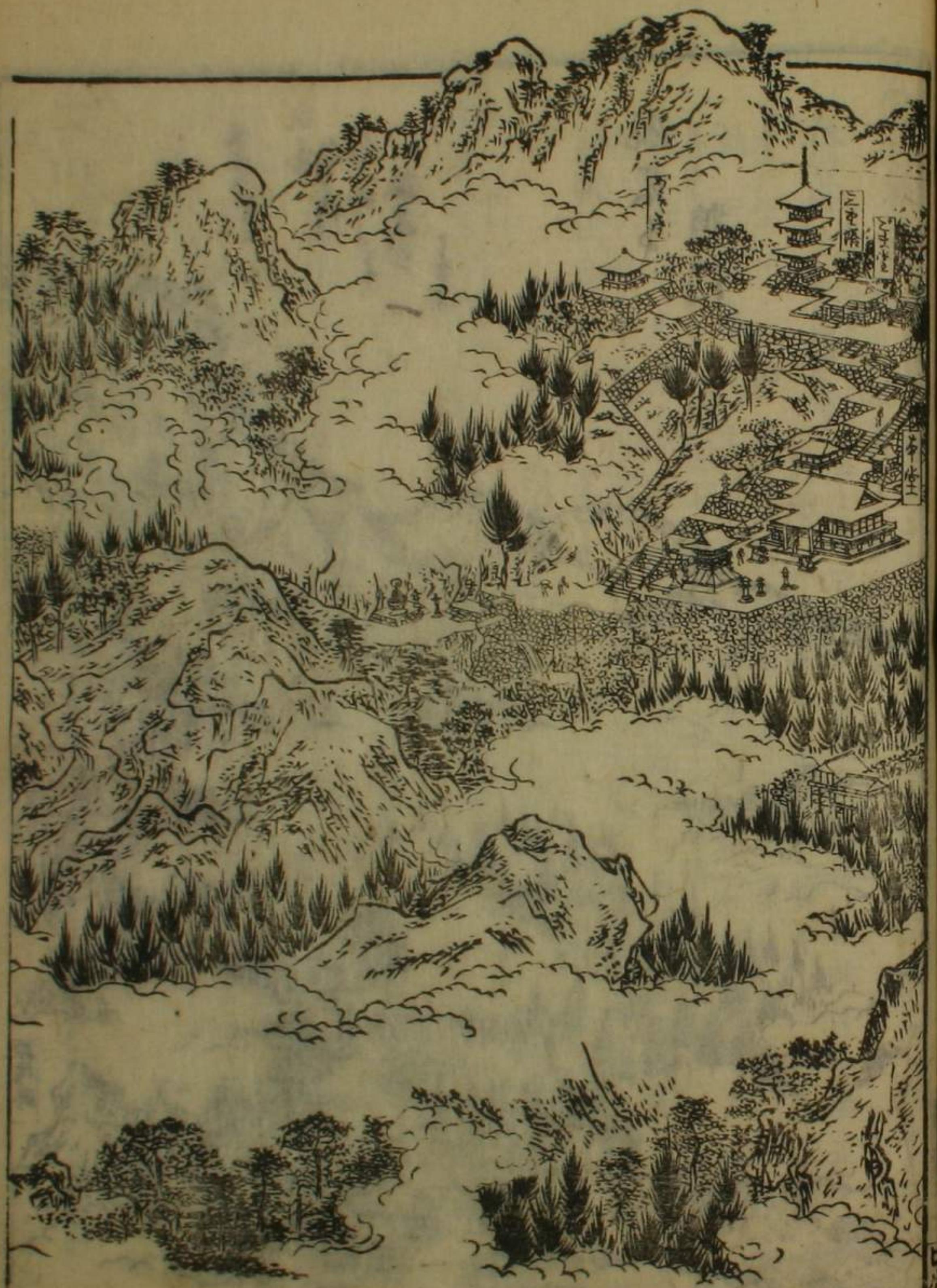
馬背卒鼻傳は山より

と安置せ乍車あら奉來は願をと奏トクれを獻感のりて全三年造立其後
光明皇后御坐にて夙未すれ額と賜文青赤黒の三鬼ありて常ふ利修仙み
隨從せり仙人入定の時三鬼の首を某師堂の下に埋焉山乃守護神
元和年中奉堂炎上火没遂に折損石壇もりそれ以出一あるの懲僧初て
二鬼首と云ふとぞみそのやく封して藏め埋れどりと宿前利修仙の跡へ
勅使公宣卿登山の折り奉宮嶽見鼻孔より其時老翁歿れ導火して勅使
弘昌山へ送りを公宣卿能くも

西霧や海山のもじこね似く浪やとこけだね風の音

奉宮嶽の神傳ふもひ半と記を毎正月二日十四日に某樂を祝ひ獅子舞
田樂修正會節捧次振も三鬼の由縁と云ふ折開山利修仙人原山城園ニ景
里賀長間賀都岐麻呂のふし欽明天皇紀三十一年庚寅四月七日小延利修
童子と号く族長の法忽然と山嶺少佐ノ爰中に五岳山の長狀仙人
ふ渴一千尋のあとと搜りゆくが其峯名千壽峯と號き其後方其水
保ちるより万壽峰と云所今あり陽成帝元慶二年羽仙人二百九載
の附勝岳の深窟小入定へ高木慈氏の出世と俟と云う巖窟小穴水あり今に
時々振る音幽小嘆ゆきふこれ武陵人桃花源小遊不似たりも江府れ業
あくふ清もよき多く秋葉山より登りて山路八重と屢てあくふ到京師より清
きもの御油の驛れ端より入る高山門がまで八里餘あり御油東上中村
篠田大林半隈町長山小岡柿本上宿八幡野口御古屋權現
野田新城新間下野新里牛十丁宗高志多羅大壺岩度
友波新間下野新里牛十丁宗高志多羅大壺岩度
瀧川豊川の上を追分門谷あれまで三里山川
旅泊ありとれより橋を下り樓門ふへ石階以登り半舟く九町まを
町毎右標ありた右より老杉翁齋にて祖の生る半壁をう傍底の側
やや僧房連りて左台道言の二流あり一念二十日諸法を取て胎金兩部の羯
磨會以具一ノ次才小光明實閣金塔神窟佛龍玲瓏にて壯觀
直す王維が併て好一山水絶勝くる清涼寺にて至州の名を傳る
才の名刹也

鳳來寺





風景
總圖

秋霜
ひづれ
旅宿
まくら

石巻神社小名郡神郷村ふあり吉田より三里鶴東山二川の山を延喜式内例文正月十五日九月十六日

祭神大己貴命東山の主

風土記云三河國八名郡美和神社圭田五十束所祭大己貴命也

齊明天皇元年乙卯始

圭田加神禮有神家巫家云蓋此社乎

錄云仁壽元年冬十一月授參河國石靈神從五位下

每歲正月十五日年穀占の神羊あり神みやぞ彌と考十八かの候

穀の金へ入其管の中穀の入る事無く其年諸穀の豐凶と考

穀占の神羊の歲内揚沼泉の間わもあら肉牧正神社揚沼上郡

安曇社等名高

粥占もりて大根引

窟觀音吉田より三里半東大岩村山間ふあり

窟見山窟堂在本山中

禪宗

富士紀行

五代を以てそれぬされ石のみ大岩山と名す

本尊千手觀音行基の化長五年天平二年造立と云初の岩窟の妻

堂内の額施無畏と書を寶政六年播州姫路酒井侯

自承して大岩堂後小なり高り八丈幅廿丈餘岩形龜か似たり故曰山號

喜捨新江戸谷中勤々進モ

遠塚解ふらゆ

白須笑すて三里の方小田原山遙ふるゆ

五代を以てあるのめあがあれもこののうちとてます

唐令

光慶脚

唐令

二
川

二
河

巖窟觀音

江國



岩窟
あらくつ
九
く



遠隈川

二川の東ふ跡り二州遠州の國界也

猿馬場

諏川より廻左右原山を小ね多一里の處の店小柏解松の木あり
高サ十丈余市二十丈許猿馬場の旅店小柏解松の木あり

晴記

猿馬場の木と仰るよ土田松古木にて二川の町と生す

海きの松落とれ遠をせふ東の山よりて富士の山へ向く

生れ年うふゆも山容ちくくる娘へくわくわくれゑ

白鷺の毛いゝを袖ぐらひすまゆふうゆる

え度々

白鷺賣

荒井まで里井六町又白井も書は須笑へ奥園の俗語ふ眞砂の郷す
所とつべ洲賀と書へ賀ハ財字と標須賀也須賀も過れふ日ト岐宿

初ハ波見坂の下やありえ保年中津濱

ては所へ波見坂今

白須賀とつ所あり

白須賀とつ所あり

今

波見坂今

波見坂遠州七十里の大坂也海ふ邊弱水三万里の所あり浦の松や織の

波見坂冲三里の澳舟へ去の海よりかくれ浪打の船浦船のふき

みゆは波見坂の船

波見坂今

波見坂ね吹りて海風ふと一瞬の浪打花やちからん

傳人手本

今そぞれ波見坂の波見坂あらむ野すとおとせ

足利義教公

波見坂ね吹りて海風ふと一瞬の浪打花やちからん

法印光孝

波見坂ね吹りて海風ふと一瞬の浪打花やちからん

傳人手本

波見坂ね吹りて海風ふと一瞬の浪打花やちからん

法印光孝

波見坂ね吹りて海風ふと一瞬の浪打花やちからん

傳人手本

波見坂ね吹りて海風ふと一瞬の浪打花やちからん

法印光孝

波見坂ね吹りて海風ふと一瞬の浪打花やちからん

傳人手本

波見坂ね吹りて海風ふと一瞬の浪打花やちからん

法印光孝

波見坂ね吹りて海風ふと一瞬の浪打花やちからん

法印光孝

波見坂ね吹りて海風ふと一瞬の浪打花やちからん

法印光孝

波見坂ね吹りて海風ふと一瞬の浪打花やちからん

法印光孝

波見坂ね吹りて海風ふと一瞬の浪打花やちからん

法印光孝

音無て日射る波もたゞ山あひ泊やまゆゆき

津守廻多

渓跡ちうあさへれと高師山峯まで同へた風をあく

安達法師

秋風すよく月の高師山峯よりれ渡れ幸せまゆる

長谷宣家

高師山をほうにそゆうすの根を行き人ふみてぞあら

西行法師

鶏風す渕とりづる友船を高師の山の船もくろ

慈鎮和尚

風すを高師の山み白波の舟たらしく淮くらむん

雅育

高師山ねくらむのね風すとの里の殘浪の聲

鳥家

高師山すかくとく風まくとくすれ渓ふらの鳴らん

源光行

岩浦の遠江の櫻ふ高師の山と空ゆうだり岸に散ひゆうやどに谷戸のうれ

香家

嶺て岩浦の波まくとくづくを拂川とす

士基日記

岩浦の駒うちつむ谷戸の音も喜しれ山ふきなり

源光行

たゞ山松すかくわく船の橋ゆくうて月つるうる

五條内府

橋本自管すりま里新東むじよ宿駅めり

増基法師

女谷長う遊姓群年を故よば名むり一歳小賴朝つの家止東もくふ

右大將

たゞ山松すかくわく船の橋ゆくうて月つるうる

右大將

橋本自管すりま里新東むじよ宿駅めり

左大將

同書云同年十二月四日天舞前右大將家令下向閑東

左大將

同書云嘉祐四年二月七日將軍賴経公上洛之時今日

右大將

着御橋本驛薩真太郎實時宿舞澤

右大將

同書云建長四年三月十四日宗尊親王鎌倉御下向之時

右大將

今日橋本驛有御宿

右大將

荒居古老遠湖記云橋本の遊里次花香町といふあり人の多く

右大將

東方とあるて序石の唐今のともも拂うん花の名の町

右大將

橋本紫多贈物先之有御連歌

右大將

たゞ橋本のく風くすりまくするる

右大將

同書云同年十二月四日天舞前右大將家令下向閑東

右大將

同書云嘉祐四年二月七日將軍賴経公上洛之時今日

右大將

着御橋本驛薩真太郎實時宿舞澤

右大將

同書云建長四年三月十四日宗尊親王鎌倉御下向之時

右大將

今日橋本驛有御宿

右大將

荒居古老遠湖記云橋本の遊里次花香町といふあり人の多く

右大將

花者町を今橋か東福寺の東す

風爐の弁

名水より今舊布の村中民家の就業すあり今ふ邊をく、此處より

角避彦

神社延喜式内名神大橋本村すあり今上下謫訪明神或ハ

文德實錄云嘉祥三年秋八月拔申詔遠江國濱名郡

角避彦社列官社先是彼國奏計此神最社職大

湖湖水所溉舉土頤利湖有口開塞無常湖口塞

則民被水害湖口開則民致豐穰或開或塞神實爲

遠湖振権記云角避比古神社大湖と見壁くはり、一の開塞す是

則神の守護と文獻の記又記せり多ゆくは漢の開塞公守り

神人也、大財神と云ひあれ角避彦神とあぐべ

紅葉寺

橋本の西小あり中御足利義教公富士紀引よけ寺入本

山氏とりみれの領主殿を賣り又東福寺大神ノ祠あり

麻乃池

瀬名川海より入今ハ田とあり瀬と成又池をさす前之川の形大署少く有

ま木

浜名川瀬をうにえりてせばね糸めぐる海士の浦り

中勢ノ

日 濱名の夕波をむきし風ふ萬隊の仲もあれぬさる

小宰相

金采

白波の立つるやくらるる濱名をふかねるやく

前齊院

續後撰

沈ひる光もとくふかねのとくなむくらる海士の於

尾張

日 濱名の夕波もとくふかねのとくなむくらる海士の於

前田信家

新拾遺

立ほりけ候名のそくとくとくてあとづるま姓人

政村大昌

日 濱名の夕波もとくふかねのとくなむくらる海士の於

尾張

立ほりけ候名のそくとくとくてあとづるま姓人

宗尊親王

大江廣秀

津ち幽道

賀井古老遠湖記云濱名川をくして岩あり山野の衆流は川より帶の濱
瀬名橋今廢モ橋本村もむづくの濱名の橋本も又橋向し小小松ゑと

瀬名橋

今廢モ橋本村もむづくの濱名の橋本も又橋向し小小松ゑと

三代實錄云

陽成天皇元慶八年九月朔遠江國濱

年修造歴

五十六丈廣一丈三尺高一丈六尺貞觀四年

一萬二千六百三十束改作焉

勅給彼國正稅稻

拾遺

橋見てはやや平洋ノ族人や濱名のそくとくは事初免

金采

白波の立つるやくらるる濱名をふかねるやく

續後撰

沈ひる光もとくふかねのとくなむくらる海士の於

日 濱名の夕波もとくふかねのとくなむくらる海士の於

尾張

立ほりけ候名のそくとくとくてあとづるま姓人

政村大昌

日 濱名の夕波もとくふかねのとくなむくらる海士の於

尾張

立ほりけ候名のそくとくとくてあとづるま姓人

宗尊親王

大江廣秀

津ち幽道

寄を島中 寄を島中 滨名の橋はえりやあむぞれするねのせき 定家

同

新つまく河井ありと萬久う濱名の橋はもろのタゞと
篠波橋 新とあがめのうちにちあ大佐山を鎮めます 篠波橋 新とあがめのうちにちあ大佐山を鎮めます

同

十六夜日記

此の宿泊は一とつとてゐる。ばらと光とつらちとあゆく、とびちらしも

かのせふともつる岩せうるふもつて

かじらわらまきをまの岩もよをひを渡のよもと袖小足あれて 河井

橋本とづへるよけは美なれば空くへくひゑく景氣と心事

うー南やハ海湖あり奥舟波よりふゆよハ湖ひあり人家有

つゝれりそのわざとふ洲嶋遠くさへねまびくあいほと見

おもてふざきぶ松のひき度の若つばれ少くも行へ多とす先

おもてふざきぶ松のひき度の若つばれ少くも行へ多とす先

おもてふざきぶ松のひき度の若つばれ少くも行へ多とす先

おもてふざきぶ松のひき度の若つばれ少くも行へ多とす先

行へ多とす先

ゆくからる都のひくさく遠津海の濱名の橋のアラキテミ

同

仲は嵩高源の津せタツヒミ川う濱名の橋ヒアヤラん

同

都坐すり下しホカクねハ濱名の橋の松ぬむと立

ま本 鮎旁小濱名の橋とたもて雲外とひる秋の丁金
漢名の傍ヒテ絶する半ひの河ヒテとひる事ナシとすも人ナシ
度くの波濤ふ松原はおがねーとるゆへ橋もとの川はだれかにたり有
時へそげく小野木とりて新ノア記橋キドリケムモアツキヒノアリ
駿河アリヒトヨリとくとく又、篠園の駿河に橋の處也。やうきの圓が、まきの風
好も時代もあり。古の御基共吾輩の少け初ノ内ひー山城の山崎橋も、卷德文皇の
傳代小架ーゆひーはの國は長橋の橋と云ひ承ひふやウラクル所て久しま
古のこみー

鰐川百首

あゆの濱名の橋れど一柱浪ひそどもアマソトタモ

遠江記 アリのふがれとくとく 中々くワツーもとてゆとゆふに濱名の橋ふとせん

ゆくの記 アリのふがれとくとく 濱名の橋のくとく

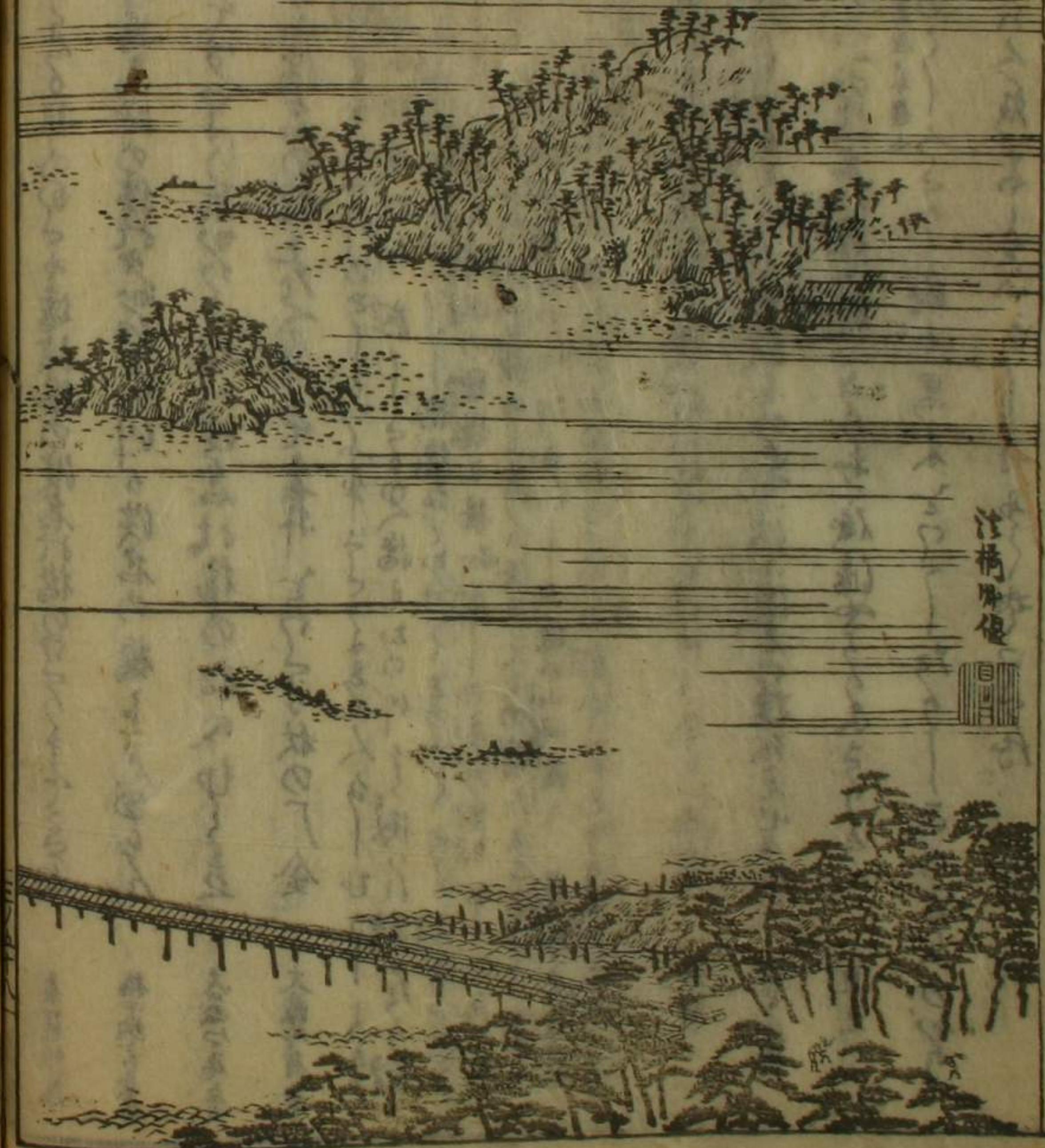
ゆくの上での濱名の橋も焼小石子を撒きやうもとくとく
ゆくの上での濱名の橋も焼小石子を撒きやうもとくとく

ゆくの上での濱名の橋も焼小石子を撒きやうもとくとく

遠州
演名橋

ひりへ橋の事
辛亥文慶廿
陽成帝の御時
御殿閣ノ事
四年小
名の遺
海とあや
王昌齡作
もくもく
つべき

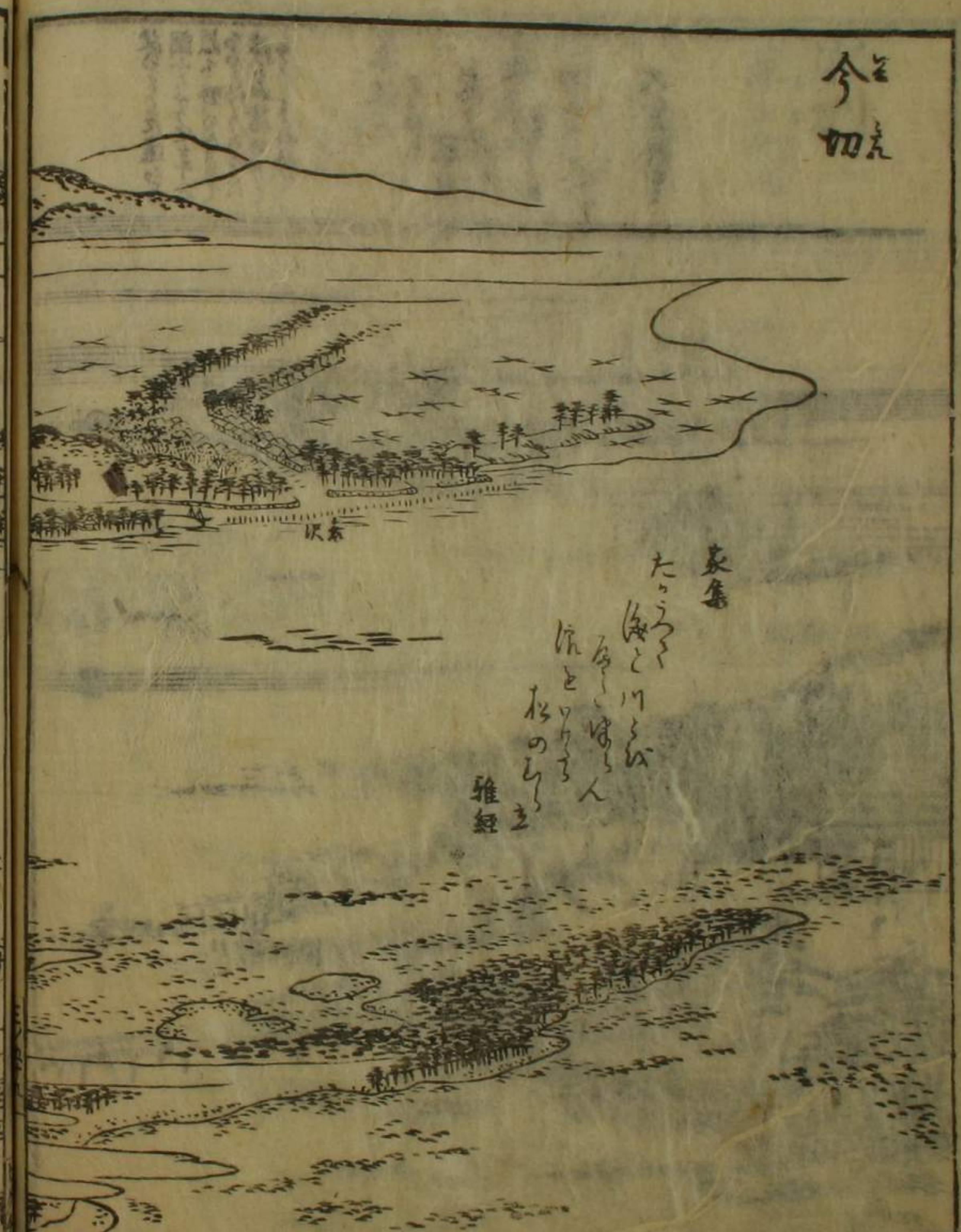
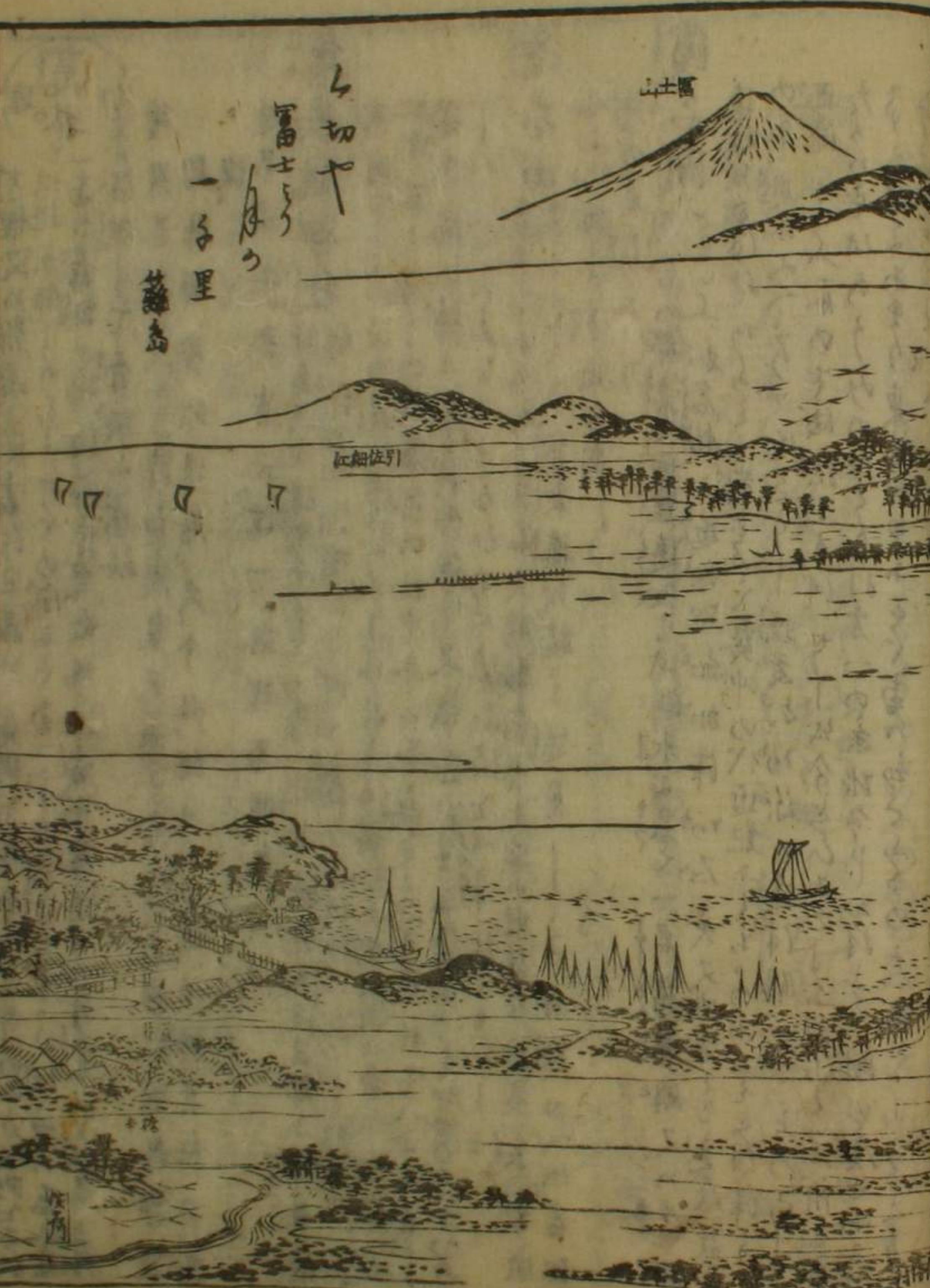
注橋傳



今
大正
東洋の
をぬかせ
ある
橋は
あり
わらう
る

大正
東洋





荒井遠江

荒井又ハ新居新居と申記し、旧名猪鼻驛。太野の關所関所の小方坂跡坂跡をさへ後船後船にて前坂前坂小者者也。

讀

日本紀云淳和天皇天長十年十月遠江國廬名郡猪鼻驛廢以來稍久今依國司詩遣使換其利害興

復入

延喜式兵部省云遠江國驛馬猪鼻十五

猪鼻湖神社

神社あり社號猪鼻坐今^{アリ}考據記云濱名郡小猪鼻湖

鎮座と云く今^{アリ}八王五社とも源邊の置北上よき一ノ室承

四年承うはりの時勅訪の社中今^{アリ}御子猪鼻也ハ多ミリ

猪鼻湖の神也あらば但一又勅訪記牛も有りモヤガ中うす

古之名をうかひゆく御名と云敷海敷海と云

荒井もあり山大將頼朝公上洛の時椎原源太

宗義は

荒井より山頭より餘火萬代燒萬代燒遠見一する。旧蹟ゆく名公

山頭より四五間

源左山

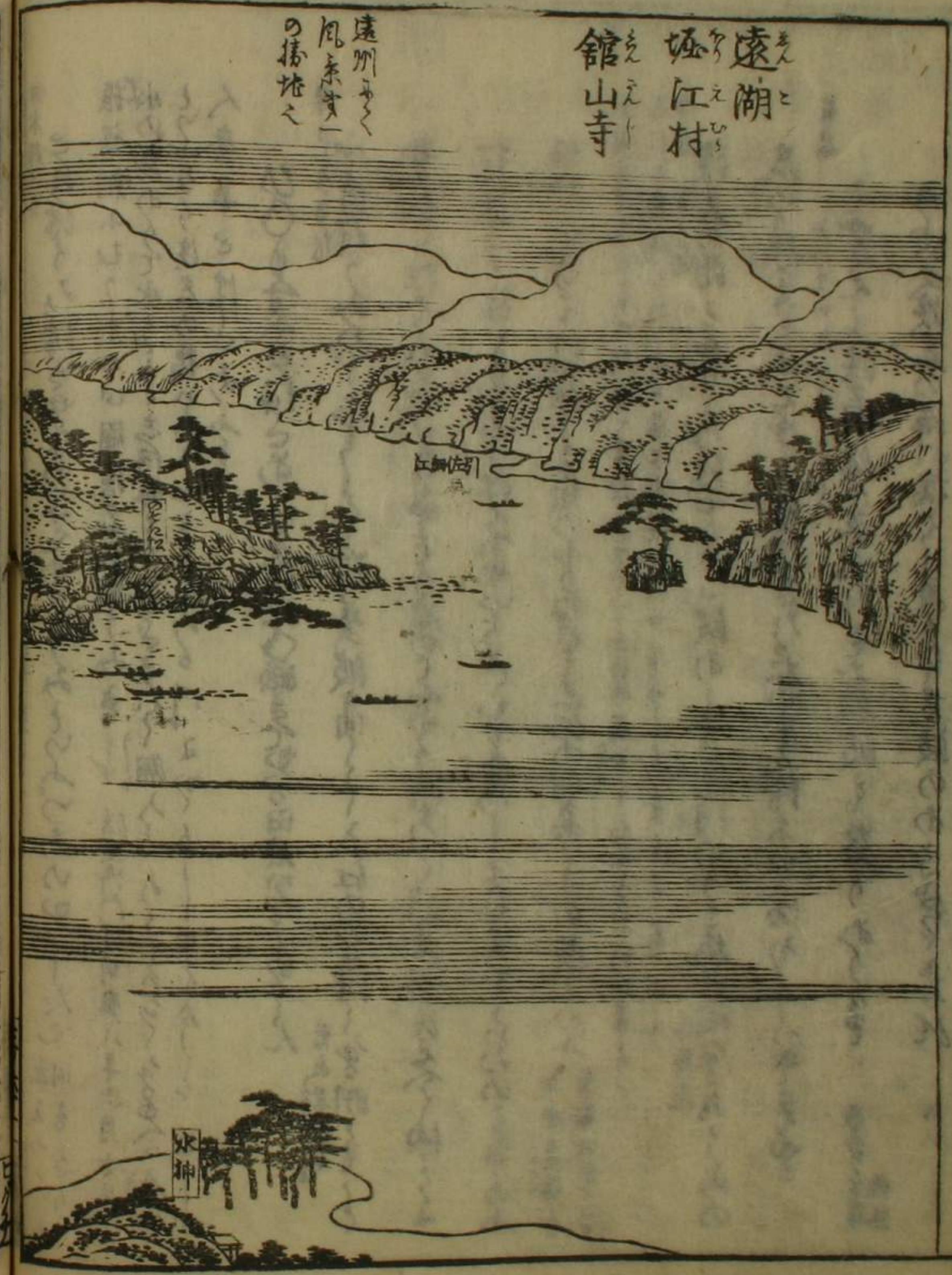
峰より山頭より方四五間

荒井大石あり

日本傳日本傳大石あり

大石あり

日本傳日本傳大石あり



寶樹の巖

赤巖



赤巖

橋本宿の河橋の下より行々たりやうと休まくまう夢いもぐ
あづみのゆきとゆふ喜ねの枝いあねむとすやがりとじゆうてき
湖上遙ふうせんぐきのちのれの顔か老うて西ふのそゑく湖海をく
そびこうてまゐる深ちく風のまくにつてはわつのくじゆのせても是も
かうぐれとも湖海の淡鹹の氣味こと

安休名書

高師山より來てこれを渡ねのち遠死湯の入海

憂體

むうの舞沢のやううとう淡名の橋まで下りみどうのね生すきあうみ海
海と名づて中少一筋の入路ありとそへう古老の傳云ひしの橋奈川東福寺
とう木履まで舞沢の町へ齋よのむとゆとくり神仙傳ふつる東海北三ヶ
妻田うらと半孤見るといはあくの事

今切

後土御門院御宇明應八年六月十日大地震

湖

と潮

あさ

後柏原院御宇永正七年八月十九日櫛の貝生山崩れ舞
坂の原沙破り傾倒とく。又其後元禄年中地表集湧あいて海上
あく、風強くて波高く渡船の災とられを宝永年中官承う
有司あり今切の波頭は数万の杭を打て避流とぞえ又
舞坂の方くそへ海中半道の向波戸と築きて波船の風
波と穏よしとく。沙とめり自由なり

丙辰記

遠州荒井の海から奥の山五里をく海とくとく大船も出金せず

羅山子

山よはくさたる陸地移り一ヶ中ひ山ちうや此身かびとくらけ出
て海へ入事れ其流がくわく流とありて今切き名はるうー古老いひ
傳う我國の伊弉諾伊弉冊の產始ひ大己貴少彦名のほくねるとく直晉
いと代りむを候うせ泰山と巨靈が壁開一くわくすうる事も候うや
一葉扁舟寄旅身潮波通信遠州濱

濟北集遠州橋下作

松根沙上此盤桓且以脚憲換目歎

左海右湖同

碧長虹併飲兩波瀾

身延紀行

荒舟のワタリ富士山とくら

碧天空白白雲間走

率兒童亦仰顔

東海初遊多少客

富山不敢向何山

東福寺虎閣

元政

幻の休室寶高あ布ぬき伎云

角避寒の神くらあそび宿名の湖は名神えどくへくさくは是とう海らう
せらと舟漕度々セく小人え大人見乙若村振ふとくとくあよみむかはよ
小舟多くうみくまえい海ふ秋の木叶美ちくせりすくあり中畠どうくま
うち舟へ警けの漏よとく本興寺えすうげ中川恵庵并雅康らの
法義堂のむす書付ゆふ多平

半びよ絶もつあほの里よとくへくさくは金山後法度を有する

汀ぞり寺々入久寺二町辻たよ双樹の様なりたとほのまれ生田の杜れ

若す似すう門よ常亞山の嶺とゆりへんの附經の常亞山就き山内

蝶友

山山やさくらのち能と音ちのきり

併のあひある堂も僧の籠ねふわもえみ蓋あてふるハ箇里先定てあまきり

一ノ室またこらきとまゆりてきくふ所經うる。

遠州入野

ありくみらむぞ備經もあくろあき

山山やさくらのち能と音ちのきり

浦を高砂山れうーろよらこれりとくや旅店の陽は渡の松よもぐく

渡ようこらせてねの梢とあらふ白波とよもゆふくの風ちひく船の行

とくとく入出の浦へとひーく正大寺のむる山が渦山しづく湖よ

のそりうなよ太田の江左よ大知波の江くとすすすす乃あみ様を

くふるとはあそはとだりくよ吹きとくのふ見下すに花の木れに

波の立きればり川と紙舟揚ひれと波の花とも見るかくくつひキ

ゑるれす一湯屋醍醐の花よや)かくくく光さす一岩岸

千貫ねとつあうて旅たくまほよく礁岩とつぶちひき源よ

つくさざばらは湖の中よきらのぼく石投すむすうれを形

皆のあ立ちよむすでよおそれり安物天女のやうしもと紅の湖の

中よ行生浮と見るーーうよう奥のかとく渕名々とくふ萬山せ

すうー中水も御よみかへるあらう船を出入りとあ飯廻

ほくのりふあうみのあくれるこくくに世をあれる承るくく村里よ

かず半夷くみもりとをりは伊勢の神領作^{アカ}の庄うくく

その能波とくうき神勝の庭のう岡本とくふ里ふ神主をま

りくのめりそく寝よくとくの十一月よあめうりくく

ひとみく一日のやくよ麻とくみ布よ敷うくく保勞(ハラウ)とくく

くくにあれさん神衣裳よみら赤引の神間あらく御衣接他と

いひまく伊葉屋張三郎遠江よりくるわあくとくの式くうふまわあう

とくさんねああれうちの作衣料ねぐー今も公こうちをまくああ

木たううるところまく漫酒更のうのとくうーと公よとくとく

大福摩訥耶寺といちあう莊園給うくのうある古寺ともううき

時代とある里の名あら和名録よ後名郡より代の公名あるといひあやされ
るあぐれと里人を頼政といひて大將の姫と化す。附して勸
賞よ賜ひたり地あれとく名後すといひ傳よとくあとまゐの八室揚
の料よ裏られ一地と花垣の庄とするそわしもありその姫とさく
する猪集をといひて姫もはまうのものありとくちうにあらう
ニ猪鼻井伊谷の名あれをえりひそくや三ヶ月里あらういとくら
と攝取のじふれもゆうもうりぬ海風よりく毎ながくへことねと
さくして三里あまりの海の上にひまむとこもくりて友山まで
あら湖の中へつとぞ生ずる山邊多く寺を山のうはよあら山内
あらう赤き岩をうてり山を高くたはくとあくねくうか岩
せよ元くにそひそひのねよつゝほえつみてけんひきうきつに側
のあうでれちのふうふう川をくねかせ山と引佐山すみはり山と引佐山すみはりあさり山
佐郡の山とれもて蔚翁流きの江よへると引佐細江すみはりとくらを
つくの人のつぶら山ようじ紅の細くえゆれを細江すみはりとくらを
とあしきふ古から多き也

引佐
千載

細江

かうえ

所を右の紀よゑの古能多

みとほく一の真善とく他合せ

東北行

富士行

遠半の引佐細江のみとはくふうせりともまめてなり
引佐細江ともぞなりするも

唐浦

唐浦

行

華嚴法印

引佐細江の御事は不近の方あるもうへるをゆきうます
され引佐細江とくふとそ田をとげとくれ名所
かくらはくちとくまとくねと人のとくまくせやくふ
その奥の方と伊の谷あり建たれのひを遠のくにり人
ちふとくに住むとくの限づくもくと見ゆよのあうる
このゆうりなり古財の肉裏にくくとくに人ありとく人くとく人
親王もお所と所産取うつるを終ひと見井伊の歴史ありとく
御お御集よそとく

李花集云延元四年春の近遠に國井伊藤よ約りとく後兵の舊に
つく處今のれおとくの限づくと見ゆ一とくとくとくとくとくとくとくとくとく

宗良親王

引佐細江の御事は不近の方あるもうへるをゆきうます
され引佐細江とくふとそ田をとげとくれ名所
かくらはくちとくまとくねと人のとくまくせやくふ
その奥の方と伊の谷あり建たれのひを遠のくにり人
ちふとくに住むとくの限づくもくと見ゆよのあうる
このゆうりなり古財の肉裏にくくとくに人ありとく人くとく人
親王もお所と所産取うつるを終ひと見井伊の歴史ありとく
御お御集よそとく

李花集云延元四年春の近遠に國井伊藤よ約りとく後兵の舊に
つく處今のれおとくの限づくと見ゆ一とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

舞坂遠江

前坂も書してみへば幕原あらひら青波、松原とひよ
宿州下田まで海路七十里ほどを遠江灘と云ふ

荒井よりの便船、嘉坡よ養駒に

嘉坡のうちとして所をさむり江南を越して西を海の諸

ち、錦花繡草はすゞひともとて白波のと有とものはねかねう

そのるねまくもひよくも風情小春信よしよせ美庵耶／＼よ

ゑゆる漁人約窓わくえも見ゆみやんまみ縫と留められをほくと

あ光ゆく往ふうちつれる旅人のゆうと室をひづめひづめとくは原よ

本縁は觀音ね／＼ほと佛堂をわかれまくわくとらなる年の房の

うちふれぬなまく年月と送る程よ一と勢のぞむりわくと佛舍へわく

筑紫へむくは想善乃御がまくまくとくがおは本意ごくと古く／＼

ノ御堂と造り／＼心のゆよ／＼きなづる佛舍そのそじ事ゆま

きあり佛堂が造り／＼人多くまくとぞくある處の金毛御堂へ

まうとれび不濟の匂か風よもぎくわくわくわくわくわくわくわく

うり願書とあ／＼と戸帳の紙ふ端び付され弘誓大ふき事

海のか／＼とづむたのり／＼あほえく

ぬり／＼か／＼とみみか傳／＼もとまよ／＼者とすふも

光行

馬郡觀音堂

兼保の東馬郡村ふあり土人一テホリとづ大聖院と号は右の記よ

音羽松

海道の奥小波波村もあり古ねや／＼枝派よ／＼破よ遠ひ又立延く

あ林二つ堂

あら林村よ／＼も／＼奥洲伊達秀衡の室上京の時うふ建たれ

賀長祠

岡部ら伊場村より京師上聖院行岡ニ歸定朝の傳領よ／＼あ／＼

甲江山鴨江寺

鴨江村より古義真言宗

高野山實性院の末寺也

本尊聖觀音

本堂ふ安徳其外御影堂、經堂、鐘樓、塔跡ハ本堂の東

三十三所

規定堂攝侍所等ハ本堂の西より、安貞院、金持地藏、燐燈堂

五智如來ハ二王門の内より北藏堂の内外より八王子祠ハ東邊をより坊舍

真言院

藤本院、蓮華院、圓滿院、西寶院、實蓮院、光明院、妙音院、吉祥院

西寶院

其の僧院室坊多一

津内方四町餘よりて出むる大利あり

叟駄拾遠云む／＼大宝のひは里よ觀世若公信も貧乏農民あり又南都より

東の方より女公宿一ま處の饗ふ山に入く草と海／＼ヶ錦の倉よ入る

多くの金銀骨董是則日頃信もる觀世若の利生とく寺を建立し

家族富榮なり世人の人草班長者とくとく古跡寺の西より

引馬形

金門畫史 詩野絛跋助藤原永俊



後今
侍ふ子平
高木の北
秋日
内親王

富遠
江松

見附まで四里八町西勝の東海驛路餘よりこれぞ一里奉へ

かねとまき
安富門浅
四冬

波の音が風の音ふたりとて音を波の音を波の音を

太明

身延起行

波の音が風の音ふたりとて音を波の音を波の音を

ええ法師

波の音が風の音ふたりとて音を波の音を波の音を

此地神君建幕營龍蛇陣勢幾精兵

羅山

波の音が風の音ふたりとて音を波の音を波の音を

威風遠韻入松去瀬畔猶呼千歲聲

長昌寺奥唐

波の音が風の音ふたりとて音を波の音を波の音を

引馬野爾仁保布榛原入乳衣爾保波勢多鼻能知師爾

長昌寺奥唐

波の音が風の音ふたりとて音を波の音を波の音を

引馬野爾仁保布榛原入乳衣爾保波勢多鼻能知師爾

波の音が風の音ふたりとて音を波の音を波の音を

方業大宝二年太上天皇幸一參阿國時歌

長昌寺奥唐

波の音が風の音ふたりとて音を波の音を波の音を

引馬野爾仁保布榛原入乳衣爾保波勢多鼻能知師爾

長昌寺奥唐

波の音が風の音ふたりとて音を波の音を波の音を

別記又論一遠州安知郡波の駄とじハ引馬野といひ其

長昌寺奥唐

波の音が風の音ふたりとて音を波の音を波の音を

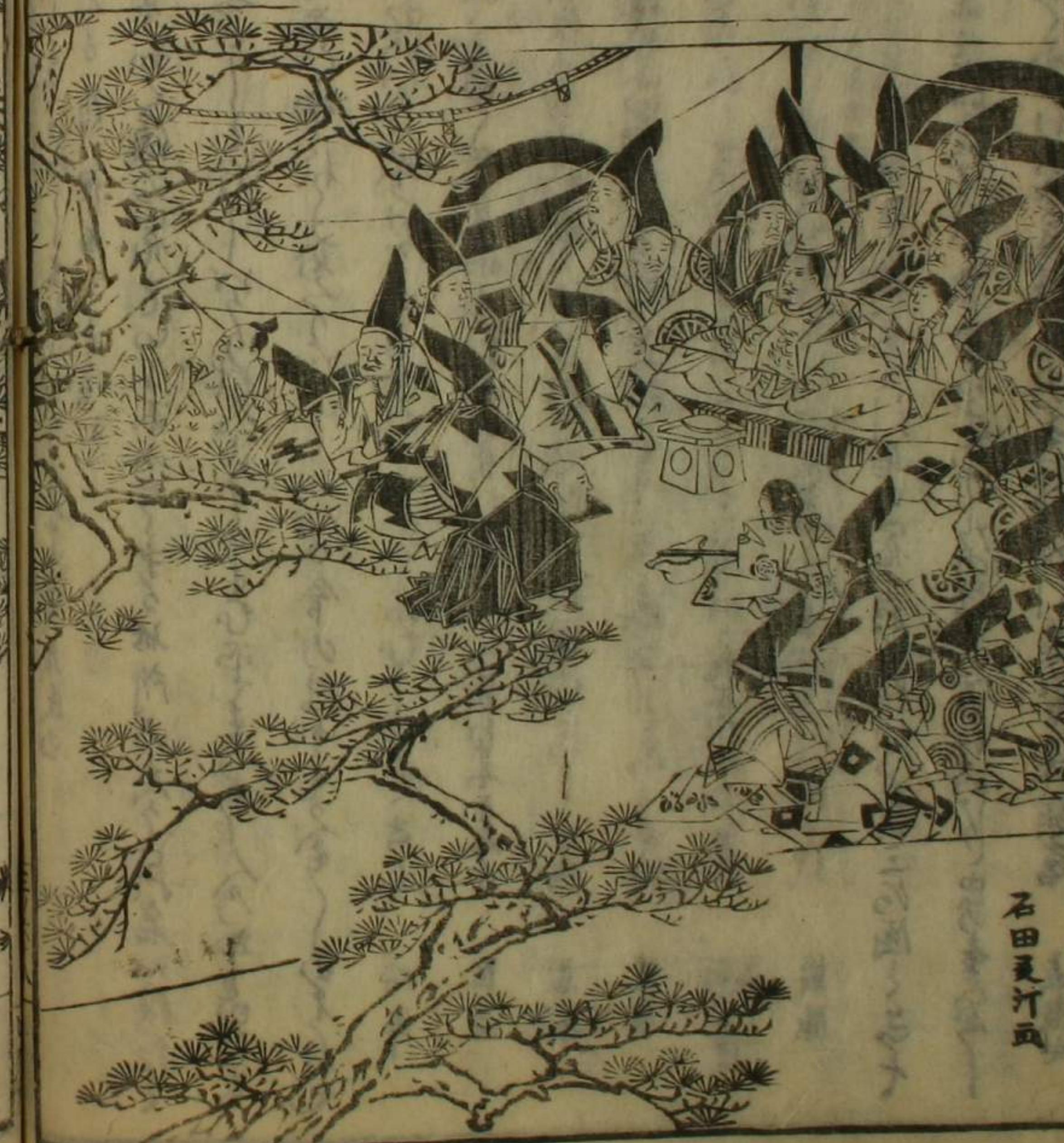
引馬野爾仁保布榛原入乳衣爾保波勢多鼻能知師爾

長昌寺奥唐

ねどりん



將軍足利義教
士氣全く
權太佐都竟尊
あと石川道
通の起まで御
を泳へて遠州
引馬等の松林
あく宴大饌
興に奈トウ
あれよう候松の
佩木山脈
今た佩木ねと



石田夏江画

詣訪明神社

（演ねあり初ハ高岡上中邊のね原領坐説弘治二年七月神詔より）

祭神

健神名方命

。社號云信州義方郡南方刀美神同牀

八坂刀賣命

社號云水瀧年中

國初將軍家治城入侍の時崇敬原く社領若干所寄附み君所誕生やく片生土神と謂ひ（後其代々

將軍家治所修復あり）神殿唐門金燈爐樓門御隨身朱

鳥居御供所山王社御祈福所嚴重

壯麗する社頭

立社明神社

（同所）あり初ハ國士久聖修波守の本多氏中ち武術能

祭神

佛龕（五社大明神と稱）太玉神

兒屋根神ハ天孫を右

捕翼（或云往古からは始より太玉令の神社）

（春日四所之保）紀そ五社明神（古諺訪社同奉小代々の將軍家

所崇教（五社領若干所寄附あり）所修復矣（神殿唐門

金燈爐樓門石鳥居御供所末社稻荷祠天滿神祠御祈福所

權現被櫻等嚴重

壯麗する社頭之例參九月七日

神馬立及波殿系く

光海靈神碑銘

（これに實矣真圓の撰）而社神主益永暉昌の碑

下藤原森朝臣

（暉昌）

貞

坐

五乃大神社之神主從五位

遠津淡海引馬縣

（爾昌）

坐

五乃大神少輔懸（多）此朝臣初冠

而嗣父朝臣之家甚家世々傳神道復受荷田宿祢

大

人之誨也日獻嚴幣

擇嚴幣白太諱詞奏神遊許多

事悉依上世而其儀雖他大祠

（波）有不及是朝臣功

之一也夫此大神

（波）奉爾東都乃二御世

（五）鎮天下

賜御軍大君始生

（波）引馬城故爲御產靈

（五）大神也下大

命千尋榜綱打延

（天）津真量（爾）量成宮柱太繁垂椽

高知足奉齋賜伎雖然積年天御蔭將壞朝臣恐

畏（美）奉齋賜伎雖然積年天御蔭將壞朝臣恐

畏（美）奉齋賜伎雖然積年天御蔭將壞朝臣恐

（波）始干元祿十七年（五）七

十餘度（天）享保十二年七月給黃金而令修造其經

營多年而修成如故延享二年九月以古式奉遷宮

竟是朝臣大功之二也朝臣家本在市中（五）每齋事

不便雖欲移於社下之丘其地有甚科峨引五百都

磐（五）爲垣累八百都土（五）得成（多）遂作出居則坐觀富貴

（五）是朝臣功之夏日乃雪時人羨歸長夏大人矣是朝臣功之

三也。朝臣貌閑雅有大度。內懷古質外長顥事。即有神道者也。又多能雜伎揚他之能。平生之意如此矣。宝曆二年六月十四日。朝臣年六十八。主患卒哀戚者及遠。國葬其社之背面。清水谷神社大副十部。朝臣謚光海靈神。訓云。宇那提理通。彌陀慶是擬所作國奇冤之功也。

孫真淵因本貢國少時受訓如父。悲慕奈止哉。其備故人其人也。宜以皇朝之言予。敢不可默。徒耻所有事而勒焉。即鑒備。騰保門阿不珉。烏奈毘氏羅斯弘。預例屢之遷哆麼。登宝畿與爾寧。嗚呼。哦佐無刀。

預例屢之遷哆麼

明和四年五月

賀茂岡部真淵撰

碑記。汝載。岡部氏の古體と賞せらる。は人の万葉考。勢語古意等と見り。今へて考する。其妙を臻る處。それを甚だ強く。又。一家にあらの意味あり。顧く詮釋など數くの語あり。もへ毛。國學英雄の人なり。牧場うるとて三方の原と。也。和地村。旅田村。外田村。二箇の松木。三年神無月。ふ甲州の大膳太支晴信入道信玄甲變。すある。當國秋葉山。白い血。多々良飯田のあ城を攻取。大居。天野三者。豈坂一計坂小軍。一二俣城と攻陷。十二月十一日。大二日。並に歩く信玄の平原。ハ郡田の名山ふ。多く。先鋒に追ひ。まで船を候。三方の源井。くろも一軍と出され。されよ。血ぬね。と。三者。豈坂三者。入り。久しく。難敵。多く。出く海。大安寺。溪ね看断ふ。あり。禅宗曹洞む。ハ大度。ふ。讀日本紀延喜式。主税部。小出。アリ。久しく。難敵。多く。出く海。行龕山龍禪寺。溪ねの東竜禪寺。村ふ。あり。古義真言宗。奉尊觀世音。大同元年海中。くり出現甚ひ。諸堂建立後。正年中。去火。金佛。水。神。祠。攝侍所。久く供殿の南。大師堂。經堂。鐘樓。金併。地藏。伽藍。燃燈。と成。舊記無之。ふあり。護摩堂。行者堂。鎮守三所。權現。比叡堂。荒神祠。古御殿のゆきあり。廊下。みき。三十三所。觀音。仏安。二王門。石。築。火燈。燭。西の方。さあり。坊舍。ふ。密藏院。理性院。密嚴院。定光坊。佛子頭。金光明院。一来坊。地藏院。圓覺坊。寶聚坊。行泉坊。ちゆうてびきの大刹。邊衛龍山公殘亭。尚寺。金光明院。あり。邊傍。米闍白。晴嗣公。又。龍山公。主。大師堂。經堂。鐘樓。金併。地藏。水。神。祠。攝侍所。久く供殿の南。ふあり。護摩堂。行者堂。鎮守三所。權現。比叡堂。荒神祠。古御殿のゆきあり。廊下。みき。三十三所。觀音。仏安。二王門。石。築。火燈。燭。西の方。さあり。坊舍。ふ。密藏院。理性院。密嚴院。定光坊。佛子頭。金光明院。一來坊。地藏院。圓覺坊。寶聚坊。行泉坊。ちゆうてびきの大刹。

鐵々松。曳取拾遺。云壁口村の田圃の仲に。根木あり。一樣。ひづる。めぐらしあげられ。林

院中御の音をさんざん酒飯に名附初よりうきされ
酒も歌も酒盛あられとほし御言も御ふちくいはれ
御の御の波すまつてくそとほくとくとくとくとくとく

青林

山頭陀寺

深ね馬込橋より南八町ふのり古義真言宗

奉尊藥師佛

行基菩薩の化一號毘盧迦摩天の化も

阿彌陀堂

丈六の院を安て二層塔

大日堂

勅額頭陀寺

遠州頭陀寺

頼於定額

護摩堂

本モ不動明王永禄丘火の後本堂を安て僧院ハ千手院實相院

運慶の作

勅額頭陀寺

本モ不動明王永禄丘火の後本堂を安て僧院ハ千手院實相院

運慶の作

植松原

源の東植松村浜より室町將軍富士見下向の時

孝房正の方

多西島へと種をもたらはるんとやけまぐる植松榮

竟著

蒲仲明

神館村より二代實錄云貞觀十六年四月十日接遠江

正六位上蒲本神自伊太刀自神並從五位下

神主蒲

祖母守源範

祖母守源範の

末裔と云ふ

茅場

左の本坂抜き出る道あり二州界付入るもよき

竟著

京江戸行役同里

町屋村といひ又龍川の西端也

大勝

川幅十町井戸額ニ瀬の二流と名す取後ノ水源也

信州源

子竜川

坊の湖也源也未と海と注く其前と大奇難

寺

はやくよ天龍寺として津利あり

あれふりと名す今も天龍寺あり

天づれづれと舟ふのちに舟もかどひあらうと

心わざくみたせする舟たゞ一つやくにあぐれ人の往來

心をも候

おれ泡のうれせがむる夜とよとぞ秋小舟元もすみに

内舟

まきと名はるつゝあり川はく流域あらやまうるおの水

みむだりありく船の去と速き事は往還旅人多く向ひの若年

若がくに川のこゝ河と歎そびひきりとすみその巫女

さくせらきいとあまうきの娘モれ志へあれどもれりよも

なき方をやめずあるひのけりとくとくひたり

は川のあきうれもよのやせ人のころをたゞとぞ見ゆ

光れ

天龍川



石田
支汀

船入道被方將
新田義貞飛超
天龍川絕稿



それをえ竜川のあづかふ港とて驚波龍門ふりおひねひわう晋
れ重耳と壁が投ト槎がほへし星斗ふ近きえ雲山むし一達成の丸み
新田鬼中將義貞東幽の軍に利くとて帰りまゝれへ早急を平犯み
そしてえ竜川の東れ宿ふ着のい俄ふ在家が壞く浮橋をぞ廢され
たる諸軍みなワツ一果く後舟田入道と大樽義貞朝臣と二人橋取
ひうわひなふの威母心の者をそろそん浮橋が一面張繩が切て捨て
たる舎人馬が車て渡りるが馬とそよ倒ふ落入澤の沈えぬれなう粟生
左衛門の遺者あら川中へ船入二町をすり放さばと馬と舎人を若
め手すと上肩が詔を取るの座が難小歩て向の岸へと着てそろ馬代
落入る時橋二面をそろ落く渡さざるも無くそろ舟田入道と大樽
と二人ひととをそくと並びり其跡より倒る共二十餘人ありゆく
皆く銀圓一千枚伴銀圓の住人名張八角とく名譽の大力めあらうが定
役て取せとて禮武者の上恩を蒙て宿ふらそげ二十人中でこそ被殺參
武人残く有り少在右の脇が絆々とそく狭く一丈餘廣く橋がゆりと
飛く向の橋桁が端を踏所かと動び城が絆が絆げあるとされば諸軍勢
遙かそれ以てあるとそくられ凡まの態が形が太悔とひの者恭
とひづれ收拾ナラとも覺ひ称とも時の運やい軍かお員をひねるそ
うしてさよと云ふ人をせむうりと記し又梅松論小義貞え竜ふ
橋がゆくせあ廢りて後赤て極小向よ時小勞モリと後かあて然すと退
はドロシ六韻の謀かと橋と切ハ武略のひ詮多う歎とも難く海に
橋が切落して敵ふ急よ襲ひれと周章ふくめぐるこひまん半
口惜シリベーと橋を警固セとて廢られ一年をとてうそと
らと考るふ義貞り武畧の人ふとて閑羽う賢豪か張毛が雄力を
兼くう後醍醐帝の聖運やはくふうあん逐ゆ
新田楠の豪傑魁カミと亡びゆる事キをみゆあれえの
ふ勢之所もとらへれど

平重衡

口

西海の合戦

小

すまけどもれと

あくまく満倉

下りてた

因の宿

かと

おおきに

銀闕玉樓
帶晚霞及
春舞袖獨
堪嗟何謀
為得新恩
寵無榮東
方及落花

箕山



池田宿

（ひよし）人よりえあ川の西岸ふれり古人の紀行多くは池田宿ふゆて
えあ川と後まく書たり後まく川願をとて東御とく

おれぞこの里よりぬと旅かうもふ池田宿の名をれと

泰義通賀

富士紀行

（ひよし）たるまき池田の里に度までもモミモニ御代ふわぞうれと

泰義通賀

内辰紀行

（ひよし）安濃の青墓遠江の池田駿のよ旅とも長者遊君のとてむつと

性還の武士狂萬は少年鞍馬公門ふはまき千金ふ矣賣とこらかね

がの江口の津を争たとうわん矢鷹太郎のめされ一湯谷もじ池田乃

端のむそらにあけま年せがくれる今へば宿天龍のつの東の端

形をうり残アて終き小民ともうろく守り居ゆうだ天電小

えちとてこのらわうるが新田た中將の尊氏と旅ひ肩てよもられ

久附深橋の桥れをうるが旅られなもまくの年え江都が

捷のひきよは旅の井をき細流ふく天龍の年と今ぞいふらる

池田驛長本倡家處子嬪娟天下譜
腰似楚王宮裏柳面如巫女廟前花
古今不盡洪河水淵瀬相移兩岸沙
治乱興亡非我事征鞍暫憩且當茶

羅山

（重海道下）
（ひよし）濱名の橋と波の入江小噪ぐ波の音さうでと
旅の物憂ふ心が盡もゆ間ぐれ池田の宿も看ゆひがの宿は長
者篤豊が女侍従の舟小其役も三位宿せられて侍従三位中将
公見をみて日本を傍ふだふ思ひ寄りの人のよひ所へ入るセ
ゆす年の不思議さとて一首の歌ひを

旅れをはるはる小舟のひせふ故づふを一ノん 熊野侍従

（ひよし）ふぞとくもく一族のを都も勢のまゝくと無 三位中将
や有ゆ中将原次石く敵を只今れ故のねへいうる者ぞ敵
（ひよし）と仕てるものと宣へて意時畏く申うるも老もい國と
（ひよし）あへらざれりもやあれと八虎の大虎殿のまゝくと國の守
（ひよし）やく波うせゆへー財うされまへせそ御最愛いひーふ老母故うて
（ひよし）痛うらざぶ都とく声鳴と申上へいともねらざれを頃へ旅の初夜とさん

（ひよし）いあせん都は安らかにむかれ吾妻の花やちらん

といふ名を仕立候と給へゆうべどもひひ 海道の家人や
申乞る都がゆく日教経れを送生の半弓と妻も院小暮ねを遠山
の花の残の者かとえく湯を浴々あ渡り候方け末の事とぞ
らひはあゆみをさそひてあるむ宿業の方見よと宣へ

はれせらとみを渠れり

熊野侍徒古墳 池田の宿攝取山行興寺とづ時宗の梵利池田

池田宿

舊天龍

上湯谷

墳殘

林叢

中

相從

山壽開齊

熊野墳

平堂の例

ふあり紫石の塔婆

同老母墳

建久九年五月

三日没す

鶴

同所

あつ村

ふあり

池田高

侍女葬墳

南里井

水

共

相

從

山壽開齊

されど池田の長とづる今れ奉陣宿のやへに安の頃は長者予
をもび候きて延喜桂現へ往して祈りをば一事を以備く其名號延喜
と名付ニ立の者をもあへど其因俗窮窟とくと云譽花額一

第の金の供も今へもとあひて鬼火をよぶれよまく枯體朝

あへふ晒く秋葉墓畔小庵の一木を施けのニ化ら上人真教

罔りづれ時あくに沟を築き善提と弔ひ着次流のちうあれと池

田通場よもみのあへど中泉よりあるの方を種蒔ふりゆ行今へ中泉ふりくあへり

櫻ヶ池入定しゆひーとせ本教秋波歲時正の日朝立時計民乃

中領をゆる者強飯と桶入池中へ投逐之時桶行も當る

中領をゆる者強飯と桶入池中へ投逐之時桶行も當る

傳小云むし比處山肥後の阿蘭梨源皇といふ加讃ハニ塔無双の學

者を黒谷法然上人の師にて源の字を賜て源空とも名乗り源空は源皇

河園梨はく葉をふ併道の済を我一の修行をもて候事のゆゑも

弥勒出世が候て二會の曉と期モテニ仰よと生で今伏保が龍身

あくろー於是オサモニシ諸國ふ下し龍は棲所を定せりに東國に使者
並模の莊記とて僧帰り來つて申すハ遠江國笠原莊より櫻ヶ浦といふ
あり爰海洋々として少く青山峠たり其間小治水汎瀬ノ湖庄
階ホー旦淫澄ホー龍蛇の接べきれ盡波ノ昂レ所ハ德寺實定卿
所領ホと申モ阿闍梨されど夢く済大寺弘法大師也弘法大師實定卿
仗とも以レ申うけ成後庭禪リテ一滴の水を掌の中掩り雨風吹起
雲ふ奈ホテ遠江櫻ヶ浦小到り入定ホカ今れぞ波瀬モキムホ駿兩車
狹のあく雷電轟震ホー村邑動搖ソ其源室上人ハ國よ卦をば治
頭小隊ニ師弟別を嘆ム恩謝の為弥陀經を誦リ称名念佛一念モ
法間ノ大悲の形と歎れ池上不頭と揚て落法の体と源室上人モ苦ふ
渴と流ホ師弟別仰迄而こそ奉れ人伴あく無モ之をカトアリ
ツバ龍身をばて源皇阿闍梨と成く少く能方行まの仰物也
キレニ又湯の下みぞ入カトモ云佛入り

○或土俗間で云法然上人ハ淨土二宗れぞ祖ハテ宗圓海内不充滿セリ今又
餘年後も貴賤かの教をうけて淨土往生以治定モ源皇阿闍梨ハ佛
道修りの師ニ畜身と處て苦惱ホー承くニ會ハ曉ひ待る其難行をさめ
て昂身成佛汝勸免ゆりと小素縁覺聲聞の二教め縁覺ハ十二
因縁と觀ドテ得道の聲聞ハ四端と觀ドテ得道の阿闍梨へ機縁に
基く太本教ハ成佛の因縁と見取リて姑龍身ハ假て龍婆ニ
會ハ曉ひまレこれと般若獨覺行とハ大婆沙論俱舍論成實論四教儀
等小口トテアリ又阿闍梨の資藏たるキ凡愚のかどもふあく法然上人
強引と嫌ひよ非行の旅難を察リテおのの機と鑑く弘通ト
淨土門ニ兩師俱ふ權化の再來られを世俗の身トテ龍體小口ト
能妨モコトふあく法然上人僧正ハ仮本魔思ふ入く生と度もまれ誓願あり
泰賢丈師トテ鹿山の九頭の竜と現す弘法大师ハ真言極密となりて

俱利伽羅龍と現し觀音菩薩を三十三の変身あり。何より大巡の方便

小あらばといきとう。法然上人師差れ約められまふ到り。もは御と誓約ある
がたらあらん。几慮のから所よあらばと言られしと安へ一。

今いまの浦うら見附みつけ處の奥うちへ今いまへあせて宿すくとある。

今いまの浦うら八幡宮の後うしろよりあれ今いまの浦うらの裏うらとある。

今いまのうちを看みぬまふ宿すくつて一日二日をすうたるほどふ海士かいしの小舟こぶね小
掉おとす。ほく濁なごの也よを感かんアラズ。れば陸海りくかいれわの。どうももさだととく島しまだ

多く南みなみの松浦まつうらの波神はづみ波洞はづみ。やまた長松ながまつの風かぜをひく。む名残なごり
多く。香野橋こうのばしの宿すくを似にるまのふのめぞりふくづへ是これもあら

さまくをそとあらざうらぬまわらざうらぬ。年とくに覺おもく

浪なみれきとねれあら。も今いまの源みなの井いの名残なごりとぞ零れ。

光行

袋井つばい半はん里半はん富士山ふじさんあらつまよる。ゆく見附みつけ處ところとふ

あらひをとふはあさと足あしことま共ともよしとふ所ところをはる里さとられてお

あそ遊あそし。のこもにわの井いあり。

阿併

惟いく來くわて。とほけの里さとと空そらたゞく旅たび旅たびをもとめとめ。

山奇關さんきかん

今いまの身みとなれかなれからん。もととくつけは里さとの名なとぞもも。

よしよし。かくす。おと。葉ははれて母おやす。ふド。め鳥根とりね。

元政法師

金札鶴きんさつ。みの橋はしの東ひが西にし。十町じゅう計けいたの方ほう。ふせ石いは井いの村むらとす。あり。里さと移いは云

金札鶴きんさつ。し。右う大將だいじょう頼らい朝あさ。鶴つるの體からだ。小全札こぜんさつ付つて

熊野權現くまのごんげん祠し。本原ほんはらのたふ。あり。神殿しんでん。樓門ろうもん。魏ゑ々々。土人どじん。云いひ。一。武田家たけだの

伊原いはらとす。あらかず。一。樓門ろうもん。わ。社しゃ。一。宇う。見入みいり。權現ごんげん。勅てつ。傳でん。記き。

さす。あや。ひど。林はや。みく。森もり。く。も。ら。し。浦うら。の。水みず。か。え。廣ひろ々々。

掛川かがわまで。武里拾ぶり六町ろく土人どじん。云いひ。一。四方よのう丘おか。ふ。一。中なか小田園おひで。う。て。懸けんの
め。一。其中そのなか。よ。だ。す。牛うし。泉いずみ。あり。四方よのう田畠たけ。の。耕う。と。之。故ゆゑ。小名こな。と。在いる。方ほう。
半里許はんり。小久こく。登のぼ。村むら。と。す。あり。山下さんげ。小漕洞宗こくとう。の。權ごん。利り。可こ。懸けん。齊さい。
り。あり。懸けん。遠とお。三。の。三。州。の。懸けん。縁えん。あり。背せき。村むら。を。の。方。人。登のぼ。般守はんしゆ。
の。古。旅たび。あり。寶。永えい。の。近ちか。小。泉いずみ。出で。低ひく。重お。居ゐ。旅たび。居ゐ。又。山。主。師し。の。
道みち。あり。山。上。小。懸けん。游あそ。とい。あり。又。七。義。編い。行ゆ。金。十。糸。孤こ。とと。

遠州 櫻池



國嶽の源皇らざる
龍等々今ちの時分
信々々龍と成く
遠州橘川入定
法然上人
仰恩報せん
ウ小到ア龍身と
答ホシテ
仰賣共に推化の
再來多也人
されば喰ざる半
ふれ



志留波様
とくろはと



万葉

山名郡文部

等倍多保美
志波乃伊宗等
滿川乃宇良等
安比豆之良堅
己等母加由波卒

之の庸
國もわらひのとせ
ねれやうの代の
風顔あらん



妙星寺

沓造村あり日蓮宗觀音山と号す

宝祖日蓮上人の又貴名

名産花蓮

沓邵村の名也

花蓮は嶺く

腹川脊川

沓邵の東ふれいぬ川其のまゝに小船多くす

名室

名室

雅経

名川やせ川のあれを溝をもむ里人のふとぞもられ

雅経

志乃波儀

藤原郡横峰賀と相良の間もあり白羽村の所

勧形明神の洞

社説云多神が火を出見る豊玉祖玉依姫の二柱へ安南市え年十二月十五日

鎮守す

社頭不燈明臺あり波海船の極

大井川小迫

鎮守石といふ地遠く東南の隅すく

一

裏山ある所もそよぐ東もゆく徒次買つて

所少ちゝ荒海のたに巖のそゝくと

張りゆきひゆて汝かれば馬の香ばしくはよそそねく

里人ハセナ回て勧形

いひあらそく甚所の神と勧形明神を申せ彼遠江の國

船へかむ向

かくよとまうへ山殿ふあくらゆめ

死ふとくとく

東海道名所圖會卷之三

後

